大学教育開発研究シリーズ
NO.9 ● Oct. 2009

立教大学における学習支援と図書館

立教大学
大学教育開発・支援センター
ISSN 1881-1035

大学教育開発研究シリーズ
NO. 9

立教大学における学習支援と図書館

立 教 大 学
大学教育開発・支援センター

はじめに

2009年6月17日、立教大学大学教育開発・支援センター主催のシンポジウム「立教大学における学習支援と図書館」が開催されました。現在、大学教育では学習支援のあり方が本格的に問われています。学習支援としては、基礎学力を付け直すリメディアルな教育も重視されますが、すそ野を広く考えるとき、「学生が本当に自ら学ぶという状況を作り出す」（佐藤文広センター長）ことに行き着くともいえるでしょう。米国では、「ラーニング・コモンズ」といわれる学習環境がつくり出され、そこでは大学図書館と学部の協働が成果を生んでいます。今立教大学では新中央図書館が構想されておりますが、ハードな設備の拡充だけではなく、これからの大学の学習支援を総合的に考えるよい機会として、このシンポジウムでは活発な報告と討論が行われました。報告では、①本学図書館スタッフによる米国大学図書館視察報告として、「図書館資料」から「コンピュータ」へ、「個人学習」から「グループワーク」へ、「利用」から「滞在」へ、そして「閲覧」から「学習支援」へ、と大学図書館の機能が大きく変貌していることが紹介されました。②の本学図書館取組事例報告では、わが国の大学図書館の活用の実態についてデータとともに具体的に検証がなされ、立教大学図書館で始められたラーニング・アドバイザーのような新しい取り組みに多数の関心が寄せられました。さらに③教員による授業実践報告（経済学部、経営学部）では、授業内情報検索講習会のようなユニバーサルなサービスは充実してきたが、それを学生の動機付けに結びつける必要がある、またインターンシップのようなカスタマイズされたニーズに応える図書館との連携が有効である、という提言が与えられました。総括として、これらの多様な学習支援の役割を果たす存在として、「二兎を追う」（石川図書館長）のがこれからの大学図書館である、ということが言われました。そのことは、図書館のサービスの拡充が求められるということだけを意味するのではありません。むしろ、授業を通じて、学生を図書館の豊かな知的リソースにつなげていくということが、学習支援そしてファカルティ・ディヴェロップメントのこれからのあり方として示されたといえるでしょう。

なお当日の参加者は、学内者65人、学外者14人、計79人であり、図書館スタッフの積極的な参加とともに、図書館以外の教職員、また学外からの参加も多数あり、アンケートにおいてもびっしりと記された長文のコメントを何枚もいただきました。またこのシンポジウムの企画・準備段階において、石川巧図書館長、青木康前図書館長、阿久津美都子図書館事務部長、牛崎進前図書館事務部長はじめ、図書館スタッフから多くのご助力をたまわりました。各位のご協力に感謝を申し上げます。

大学教育開発・支援センター　センター員／法学部教授

小川　有美

目次

はじめに

シンポジウムプログラム…… 9

第一部　話題提供

［米国大学図書館視察報告］
米国大学図書館における学習支援
小坏 守 氏 …… 15

視察の目的を「学習支援サービス」に絞る
日米の大学の比較
日米の大学図書館の比較
米国大学図書館における4つの変化
変化1：「図書館資料」から「コンピュータ」へ
変化2：「個人学習」から「グループワーク」へ
変化3：「利用」から「滞在」へ
変化4：「閲覧」から「学習支援」へ
本学図書館の「授業内情報検索講習会」について
本学図書館は、学習支援に利用者サービスの舵を切る
【配布資料】

［本学図書館取組事例報告］
立教大学図書館における学習支援
小林 真理 氏 …… 31

本学図書館の入館者数
本学図書館の貸出冊数
他大学との比較
本学図書館の学習支援1：新入生図書館ガイダンス
本学図書館の学習支援2：情報検索講習会
本学図書館の学習支援3：図書館活用講座
本学図書館の学習支援4：ラーニングアドバイザー
学習環境の整備
今後の課題
【配布資料】

［図書館を活用した授業実践報告１］
初年次教育における図書館の活用と学習支援
ー「授業内情報検索講習会」を中心にー
谷ヶ城 秀吉 氏 …… 49
情報収集能力の取得を目的とした
「授業内情報検索講習会」の利用
講習会後の図書館利用スキル状況
今後の課題
【配布資料】

［図書館を活用した授業実践報告２］
産学連携教育における学習支援と図書館
高岡 美佳 氏 …… 61
国内インターンシップの事前研修
図書館とのコラボレーション
授業後のアンケート結果は概ね好評
コラボレーション型授業のメリットとデメリット
【配布資料】

第二部　ディスカッション

［指定討論］
図書館と学生をつなぐ教員の役割を問う
小川 有美 氏 …… 75
組織的な取組みを考える
学習支援における２つの機能的な要請
図書館初企画の授業を経験して

［ディスカッション］

［総　　括］
新中央図書館の開館に向けて、
〈内〉側と〈外〉側の取り組みの両立が課題
石川 巧 氏 …… 91

立教大学における
学習支援と図書館

2009年6月17日（水）開催
シンポジウムの記録

プログラム

立教大学における学習支援と図書館

[開会の挨拶]　佐藤 文広 氏（大学教育開発・支援センター長、理学部長）

第1部 話題提供

[米国大学図書館視察報告]
米国大学図書館における学習支援
小坪 守 氏
（図書館利用支援課課長）

[本学図書館取組事例報告]
立教大学図書館における学習支援
小林 真理 氏
（図書館学系図書館課課長）

[図書館を活用した授業実践報告]
初年次教育における図書館の活用と学習支援
―「授業内情報検索講習会」を中心に―
谷ヶ城 秀吉 氏
（経済学部助教）

産学連携教育における学習支援と図書館
高岡 美佳 氏
（経営学部教授）

第2部 ディスカッション

[指定討論]　小川 有美 氏（大学教育開発・支援センター員、法学部教授）
[ディスカッション]
[総　　括]　石川　巧 氏（図書館長、文学部教授）

［司会］河野 哲也 氏
（大学教育開発・支援センター員、文学部教授）

日　時	2009年6月17日（水）18:00〜20:00
場　所	池袋キャンパス　太刀川記念館3階 多目的ホール

立教大学における学習支援と図書館

司 会
河野 哲也 氏

河野　それでは、お時間も参りましたので、これから「立教大学における学習支援と図書館」のシンポジウムを始めさせていただきます。私、本日の司会を務めます文学部の河野と申します。よろしくお願い致します。さて、まず最初は開会の挨拶として、大学教育開発・支援センターのセンター長で、理学部長をしていらっしゃいます、佐藤文広先生からお話をお願い致します。

佐藤　大学教育開発・支援センターのセンター長をしております佐藤でございます。本日はセンター主催のシンポジウム「立教大学における学習支援と図書館」にご参加いただきましてありがとうございます。話題提供をお引き受けいただきました方々にも、心からお礼を申し上げたいと思います。私どもセンターでは、一昨年より大学の学習環境についてのワーキンググループを立ち上げ、検討を続けてまいりました。そのワーキンググループのテーマとして、教育におけるICT活用とならんで図書館がありました。その過程で図書館とも協議をさせていただいて、今日、「学習支援と図書館」というテーマでこういう会を持つに至ったわけでございます。

今、教育改革ということで、質の保証ですとか多岐にわたる議論が行われています。そのような議論も、やはり行きつくところの一つは、学生が本当に自ら学ぶという状況を作り出すところにあるのではないかと思います。本を読み調べる力のような自ら学ぶための力を付けてもらうこと、そして身に付けた力を発揮するための有効な学びの場を与えていくこと、その両面が達成されて本物の教育が

展開できるということになるのではないかと思います。そういう意味では、図書館も、学生が自分で学び調べ学習をする場として発展していかなければならないでしょう。

立教大学の図書館では、単なる資料を保管し閲覧に供する場という状態からはすでに大きく抜け出ていて、ラーニングアドバイザーなど、いろいろな取り組みを通じて学生への学習支援を実際に展開してきております。一方、教員側でも図書館の活用ということでいろいろ工夫された授業がなされています。

本日のシンポジウムは、図書館の取り組みと教員の教育実践、その双方からの報告を突き合わせて、今後の学習支援の場としての図書館の在り方を探っていきたいという趣旨で企画されています。現在、新中央図書館構想も検討されていますので、その議論の手がかりを与えることにもなるとよいのではないかとも思っています。

それでは 8 時頃までの予定で、長い時間にはなりますが、活発なご議論をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

［開会の挨拶］

大学教育開発・支援センター長
佐藤 文広 氏

第一部　話題提供

［米国大学図書館視察報告］

米国大学図書館における学習支援

図書館利用支援課課長
小坏 守 氏

河野　佐藤先生、ありがとうございました。それでは私のほうからごく簡単に、全体のプログラムをご紹介致します。まず、第１部として４人の方に話題提供をしていただきます。お１人目は、図書館利用支援課課長の小坏守さん。お２人目として、図書館学系図書館課課長、小林真理さん。３番目に経済学部助教、谷ヶ城秀吉先生。４人目として経営学部の教授、高岡美佳先生に、最初４人のご提題をお願い致します。10分間休憩致しまして、第２部としてディスカッションになります。その前にまず全体として、指定討論をして、大学教育開発・支援センター員、法学部教授でいらっしゃいます、小川有美先生から指定討論をいただきます。そして、今日は本当にたくさんの方にいらっしゃっていただきましたので、是非ご一緒に30分以上のディスカッションをしていただきまして、最後に総括として図書館長、文学部教授でいらっしゃいます、石川巧先生からお話をいただいて、閉会となります。それではまず１人目と致しまして、「米国大学図書館における学習支援」というテーマで小坏さんにお話をお願い致します。では、よろしくお願いします。

視察の目的を「学習支援サービス」に絞る

小坏　ただ今ご紹介いただきました、図書館利用支援課の小坏でございます。よろしくお願い致します。私からは「米国大学図書館における学習支援」ということでお話をさせていただきます。まず、立教大学は2012年度後期のオープンを

目指しまして、現在、池袋にある4つの図書館（図書館本館、人文科学系図書館、社会科学系図書館、自然科学系図書館）を1つの新中央図書館として統合するという計画がございます。その中で展開する学習支援の取り組みについてのハード及びソフトについて、先進的な取り組みを行っているアメリカの大学図書館の視察に、昨年度の秋に、私と学術資料課の小林の2人で3週間ほど行きました。その報告をさせていただきます。

今回の視察のポイントとしましては、後ほどご報告しますが、ラーニングコモンズ、情報リテラシー教育、ライティングセンター、学内他部門との連携による学習支援を視察のポイントとしました。また、今回の視察は目的を絞りまして「学習支援サービス」というテーマで視察を行いましたので、主に学部学生への学習支援が中心になります。その点についてご了解ください。

日米の大学の比較

視察を行った大学を簡単にご紹介します。まず、アメリカの西海岸の北にあります、シアトルにあるワシントン大学、こちらで約1週間ほど滞在をしておりました。こちらでは学部図書館に限らず多くの図書館をまわってきました。次に、ニュージャージー州のラトガース大学、プリンストン大学です。そして、ボストン郊外のマウント・ホリヨーク大学、マサチューセッツ大学。最後に、バルークカレッジ、ニューヨーク大学、コロンビア大学、これらはニューヨークのマンハッタン島にあります。学習支援について先進的な取り組みをしている大学、立教大学と同規模の大学を選定しまして、視察を行いました。

まず、その中で日米大学比較の一例ということでお話させていただきます（p.25参照）。滞在期間の長かったワシントン大学は、州立大学ですが、こちらを比較対象としております。立教大学の学生数は、学部学生が約17,000名、大学院学生約1,400名です。ワシントン大学は学部学生約30,000名、大学院学生約10,000名で、大学院学生数はワシントン大学がかなり多いです。次に、図書館員について数字で比較させていただきました。立教大学は図書館の専任職員が現在30名、ワシントン大学は390名です。あとは授業料ですが、立教大学は約90万円ですが、州立大学であるワシントン大学は、ワシントン州の州内の学生が約6,800ドルですから約68万円、州外の学生ですと23,000ドルですから約230万円。この他、私

立大学ですと、プリンストン大学の例をあげていますが、34,000ドルということで、約340万円と高額です。図書館員の数も立教は少ないですが、アメリカは教育にコストをかけているというのが、この授業料だけをとってもわかるかと思います。

日米の大学図書館の比較

アメリカの大学の図書館の構成をお話させていただきます（p.25参照）。中央図書館、学部学生用図書館、専門図書館（研究図書館）の３つの種別で主に分かれておりまして、今回は学部学生用図書館を中心に視察を行いました。運営上は立教大学と非常に似ておりまして、管理部門、学部学生支援、研究支援部門の３つで構成されていました。図書館には図書館長がいて全体を統括しますが、法科大学院の図書館はその配下に入っていない。法科大学院の図書館は、図書館組織の外にあるというのが、どちらの大学でも同様でした。ここは、予算も含めて完全独立機関ということで、ロースクールは特別であるという点で興味深かったです。

次に図書館員の構成です。390名の図書館員がいるワシントン大学はどのような構成かと申しますと、まずライブラリアンがおります。ライブラリアンは、修士号を持っております。加えて、サブジェクトライブラリアンがおります。サブジェクトライブラリアンは、図書館学と専門分野の修士号を持っております。ワシントン大学には、このサブジェクトライブラリアンが約100名おります。各学問分野別に最低１名のライブラリアンがいます。次にテクニカルスタッフ、これは学部卒の方が担っています。あとは管理運営専門職、これは館長にあたります。会計担当やファンドレイジングといいますか資金調達係、そういった職種もあります。資金調達係は、大学の図書館を運営するに当たっての寄付金を集めることを専門にしています。最後に学生アシスタントですが、学生アシスタント数は約500名です。専任320名及び学生アシスタント約500名、合計約800名で図書館を運営しています。

次に、日本の大学図書館とアメリカの大学図書館の比較をさせていただきます（p.26参照）。まず、日本の大学図書館の多くは飲食不可です。携帯電話も不可で、パソコンのエリアは限定されています。会話ができるのはグループ閲覧室のみと

なっています。開館時間にも制限があり、立教大学は朝９時から夜10時半まで開館している図書館がありますので、日本の大学の中ではかなり開館時間は長いと思っています。アメリカの大学の図書館はどうかというと、制限はありますが基本的に飲食可です。携帯電話も可で、パソコンは「Quiet reading room」という会話が禁止されているエリアも含めて、すべてのエリアで許可されています。「Quiet reading room」を除きコミュニケーションも可能です。学内すべての図書館ではありませんが、開館は24時間で、レファレンスも含めて24時間対応という形態で、利用者サービスが充実しています。

米国大学図書館における４つの変化

アメリカの大学図書館を視察した結果、４つの変化を強く感じました。まず１つ目が「図書館資料」から「コンピュータ」へ、２つ目は「個人学習」から「グループワーク」へ、３つ目は「利用」から「滞在」へ、そして４つ目は「閲覧」から「学習支援」へという、４つの変化です。

変化１：「図書館資料」から「コンピュータ」へ

まず、１つ目の「図書館資料」から「コンピュータ」へ、についてお話させていただきます（p.26参照）。これはワシントン大学の統計、学部図書館でのアンケートを行った際の数字ですが、まず、「あなたは図書館のどの場所を使いますか？」という質問です。第１位が「Computer Commons」で61%、そして図書にかかわる部分では「Book Collections」ですね、それは５％です。次に、「あなたは図書館で何をしますか？」という質問です。第１位が「勉強する」、その他、「グループで勉強する」もあります。「個人で勉強する」が66%で１番高いのですが、２番目が「コンピュータを使いに来る」で57%、３番目が「プリンターを使いに来る」で20%です。そして、いくつか下になりますが、「自分のコンピュータを使う」です。逆に「図書館の資料を使いに来る」が12%、そして「図書の返却や貸出」が９％ということでした。このように、図書館で何をするのかという非常に単純な質問の中で、図書館資料よりもコンピュータを使いに来ているという方が多いということがわかりました。

こちらの図書館内の利用者を写した写真をご覧ください。学生はノートPCを必ず１人１台持っています。つまり、自分のノートPCを大学に持ってきています。図書館利用者の７ ～ ８割は、図書館でコンピュータを利用しています。図書館のすべてのフロアにワイヤレスLANがひかれています。そして、学生食堂にもワイヤレスLANがひかれています。これは、学生食堂内の写真ですが、こちらでもネット接続している方が多い状況です。そういったことで「図書館資料」から「コンピュータ」へ、ということを１つキーワードとして考えました。

変化２ ：「個人学習」から「グループワーク」へ

次に「個人学習」から「グループワーク」へ、ということをキーワードにお話させていただきます（p.27参照）。アンケートの「あなたは図書館のどの場所を使いますか？」ですが、１番目が「Computer Commons」、２番目が「Quiet study floor」とありますが、「Group study rooms」も6.2%あります。「あなたは図書館で何をしますか？」では、「個人で勉強する」が一番多い。ただし、「グループで勉強する」という方も14.7%あります。「最近の利用者の傾向はどうですか？」ということに関しては、「グループで勉強する、グループワークが必

然となっている」という話をどちらの大学図書館でも伺いました。つまり、大学における学習形態が「個人」から「グループワーク」へ移行しているということです。この写真ですが、図書館で談笑しながらみんなで勉強していますね。個人で勉強しているというよりも、話し合いながら図書館で過ごしている方が多いです。そして、これは、授業見学をさせていただいたときの写真ですが、これもグループワークを取り入れています。カリキュラムも講義中心からグループワークへ移行しているということを、すべての大学で聞きました。個人で学習するというよりもグループで学習する。それは社会からも求められている。グループワークができる、協働できる人材を求めているという社会からの要請も含め、また、グループワークで学習する方が、学習の効率がいいというお話も聞きました。

変化 3 ：「利用」から「滞在」へ

次に 3 番目の「利用」から「滞在」へ、ということをキーワードにお話をします（p.27参照）。「図書館の利用頻度は？」というアンケートですが、週に 4 回以上が 4 割、週に 2 ～ 3 回が 3 割でした。つまり、約 7 割の方が週の半分は図書館を利用しているということです。そして、図書館で何をするかということですが、「友達に会ったり、誰かに会ったりする」が17.3%です。図書館で過ごす、図書館が生活の場になっているということをこの数字が表わしていると思います。すべての図書館ではありませんが、夜10時から朝の 6 時までは大学の関係者に限定し、24時間開館しています。人員配置は、学生アルバイトを中心に行っています。図書館には必ずカフェがつきものです。 1 つの図書館に 1 つのカフェがある。なぜかと言ったら滞在しているわけですから、トイレはもちろんのことですが、滞在するに当たっては、やはり水分補給も必要ということで、カフェも必ず用意されているということです。「利用する」というよりも「滞在する」ための環境を整えているということだと思います。飲み物に関するポリシーなどもWebで公開しています。蓋（ふた）つきの飲み物は、アメリカのどの大学図書館でも許可されていました。これはアメリカだから文化の違いだという方もいらっしゃるかもしれませんが、アメリカの図書館の方に聞いてみたところ、「私たちも資料が汚れるから飲み物は図書館には入れたくない。」と言っていました。しかし、滞在してトイレに行くように、やはり飲み物も必要なのだから、許可せざるを得ない。つ

まり、管理よりサービスを重視しているということなのかと思いました。

変化４：「閲覧」から「学習支援」へ

４番目の「閲覧」から「学習支援」へ、ということをキーワードにお話させていただきます（p.27参照）。アメリカの大学図書館の発展経過について、４つのキーワードをもとにお話します。まず、インフォメーションコモンズ、続いてラーニングコモンズ、ライティングセンター、それ以外の取り組みということでお話します。1990年代のアメリカの大学図書館は、インターネットの普及、図書館の入館者数、資料の貸出数の減少に危機感を持ちました。そして、自分達の存在意義を問われ、インフォメーションコモンズを創出しました。多数のPCとメディア機器を備えた学習空間、それを図書館の中に持ち込みました。大学の中でどこにパソコンが一番多いのかというと、図書館である。それはなぜかというと、図書館が危機感を持って、メディア機器を積極的に図書館の中に誘致したという経緯があります。ワシントン大学の図書館員の方によると、インフォメーションコモンズとは、コンピュータ等のリソースを持ち、学生が来て学ぶ場所、みんなが集まる場所だという表現をしていました。インフォメーションコモンズには、プリントステーションがあり、スキャナーやAV機器、そしてコラボレーションスタジオ、複数人で１台のパソコンを利用できるような設備などもあります。そして、ゼミ等の発表で使うためのプレゼン資料作成のための大型プリンター、「Group study rooms」などが、インフォメーションコモンズの機能の中に入りました。

次に「インフォメーションコモンズからラーニングコモンズへの発展」ということでお話します。近年、ラーニングコモンズという言葉が話題に上がるようになりました。これはインフォメーションコモンズから発展してできた言葉ですが、インフォメーションコモンズの解釈は、PCやAV機器等のハードがあるということのみに限定されていることが多いようです。ラーニングコモンズの要件は、インフォメーションコモンズの機能に加え、コンピュータヘルプサービス、レファレンスサービス、情報リテラシー講習を行っている、あとはライティングのサポートを行っていると理解されています。つまり、インフォメーションコモンズはハード、ラーニングコモンズはそれに人を介したサービスを加えたという

点で違いがあるということを、今回の視察の中で理解しました。ラーニングコモンズは、「ライブラリー＋テクノロジー＋ライティング」とも伺いました。インフォメーションコモンズは「箱」で、ラーニングコモンズは人を介したサービスです。人を介したサービスとは、レファレンスサービス、コンピュータヘルプサービス、そしてライティングヘルプです。つまり、図書館のサービスモデルが、「閲覧」から「学習支援」へ移行したということとして捉えました。伝統的な図書館が、ラーニングコモンズへと進化する段階があると捉えました。

次にライティングセンターです。大学院学生が、論文の作成について、学部学生のお手伝いをするサービスです。こういった機能がアメリカの英米文学科にはあるのですが、その機能を図書館の中に持ち込む流れがあるということが、今回の視察の中で確認できました。視察を行った大学には、すべての図書館にライティングサポートの機能がありました。学部学生、大学院学生がチューターとして、主に学部学生を対象に論文等の作成支援を行っています。サービス内容は、論文に限らず、就職活動時の履歴書、エッセイ等にも対応しておりました。これは、ワシントン大学のライティングセンターのWebサイトですが、充実した情報を提供しています。論文のスタイル、例えばシカゴスタイルがどういうフォー

ムをとるのか、その他、非常に多くの論文のスタイルが掲載されています。どんなチューターがいるのかという紹介、Webでの利用予約、FAQ、論文を書く上の10ヶ条、そういった情報で大変充実しています。ライティングセンターについて、視察前の想像と違ったことがありました。少なくとも修士論文を書いたような方がチューターとなっているのかと思っていたところ、７割の方が学部学生、３割が大学院学生ということでした。全体統括は大学院学生ですが、学部学生の方がチューターとして活躍されていました。学部学生がチューターである点について疑問がありましたが、一緒に学び合う、何かを教えるというよりも、一緒に悩んで、一緒に付き合って、一緒に勉強してあげることで、質問者が気付くことが重要で、必ずしも知識のある方が教えなくても、学部学生でも十分対応できるということを伺いました。ただし、このチューターになるには応募の際、20倍ぐらいの倍率を切り抜けているそうで、大学の中で仕事にありつくということは、奨学金と同じことであって、実際は、非常に優秀な方が集まっているので、誰でもいいということではないようでした。

本学図書館の「授業内情報検索講習会」について

最後に、情報検索講習会についてです。立教大学図書館が、取り組んでいる授業内情報検索講習会は年間100回以上行っていますが、こういったものについてはどうですか？と聞いたところ、制度はあるのだけけれど、実施する数は少ないとのことでした。なぜ、そういったことをやっていないのかと考えると、390人ものライブラリアンがいるわけですから、どこに行っても、いつでも、図書館員が個別に対応をしているという点で、あまり必要性がないのかと理解しています。そして、他部署との協働ですが、図書館の中には数百台規模のコンピュータがあるのですが、これらの管理は基本的に図書館が行っているのではなくて、本学で言えばメディアセンターが管理からコンピュータヘルプから、すべてのことを行っています。図書館とメディアセンターとの協働が実現されていることが今回の視察で理解できました。

本学図書館は、学習支援に利用者サービスの舵を切る

「図書館資料」から「コンピュータ」へ、「個人学習」から「グループワーク」へ、「利用」から「滞在」へ、「閲覧」から「学習支援」へ、4つのキーワードで今回の視察の報告を致しました。私が所属する課の名称ですが、昨年度までは「図書館閲覧課」でしたが、4月より「利用支援課」に名称変更しました。つまり、立教大学図書館は、利用者サービスの舵を学習支援に切ったと私は捉えております。

以上で、私の報告を終わらせていただきます。

配布資料

米国大学図書館における学習支援

2009年 6 月17日
立教大学図書館利用支援課
小坪　守

Ⅰ．日米大学比較の一例

立教大学	ワシントン大学
□私　　立（1874年創立）	□州　　立（1861年創立）
□学 生 数（学部約　17,000名、大学院約 1,400名）	□学 生 数（学部約　30,000名、大学院約10,000名）
□図書館員（専任）30名	**□図書館員（専任）390名**
□授 業 料（学部）約90万円強	□授 業 料（学部）約 7,000$（州内学生）約23,000$（州外学生） □授 業 料（参考）約34,000$（プリンストン大学）

（2008年度統計）

Ⅱ．米国の大学図書館

●図書館の構成

中央図書館、学部学生用図書館、専門図書館で構成
運営上、管理部門（企画・広報、総務・人事、財務・経理）、学部学生支援部門、研究支援部門で構成
法科大学院図書館は、予算も含めて上記の図書館とは別組織

●図書館員の構成

①ライブラリアン（図書館学修士号／サブジェクトライブラリアン（図書館学及び専門分野の修士号）
②テクニカルスタッフ（学士)
③管理運営専門職（館長、会計担当、資金調達担当）
④学生アシスタント

Ⅲ．日米大学図書館比較

日本の大学図書館	米国の大学図書館
飲食不可	飲食可（制限有）
携帯電話不可	携帯電話可（制限有）
パソコンエリアは限定	パソコンは全エリア可
会話はグループ閲覧室のみ	静粛エリアを除き、コミュニケーション可
開館時間に制限	24時間開館・対応

Ⅳ．米国大学図書館 4 つの変化

1.「図書館資料」から「コンピュータ」へ
2.「個人学習」から「グループワーク」へ
3.「利用」から「滞在」へ
4.「閲覧」から「学習支援」へ

1.「図書館資料」から「コンピュータ」へ

図書館のどの場所を使う？		図書館で何をする？	
Computer Commons	61.8%	Studied/worked individually	66.3%
Quiet study 3rd floor	27.4%	Used library computer	57.9%
Media Center	20.6%	Used a printer	20.2%
Copy Center	15.5%	Met friends/someone else	17.3%
Help Desk	7.4%	Used own computing device	16.4%
Group study rooms	6.2%	Studied/worked in group	14.7%
Book Collections	5.0%	Looked for library material	12.1%
Writing Center	0.9%	Borrowed/returned material	9.5%

（2008年度ワシントン大学学部図書館統計）

学生は、ノートPCを常時携帯、図書館利用者の 7 ～ 8 割はPCを利用している

図書館のすべてのフロア、学生食堂でもネット接続、無線LANが大学内の建物すべてに完備

2.「個人学習」から「グループワーク」へ

図書館のどの場所を使う？		図書館で何をする？	
Computer Commons	61.8%	Studied/worked individually	66.3%
Quiet study 3rd floor	27.4%	Used library computer	57.9%
Media Center	20.6%	Used a printer	20.2%
Copy Center	15.5%	Met friends/someone else	17.3%
Help Desk	7.4%	Used own computing device	16.4%
Group study rooms	6.2%	Studied/worked in group	14.7%
Book Collections	5.0%	Looked for library material	12.1%
Writing Center	0.9%	Borrowed/returned material	9.5%

（2008年度ワシントン大学学部図書館統計）

大学図書館における学習形態：「個人」から「グループ」へ移行
カリキュラム：「講義中心」から「グループワーク」へ移行

3.「利用」から「滞在」へ

図書館の利用頻度は？		図書館で何をする？	
4 or more x per week	41.2%	Studied/worked individually	66.3%
2-3 x per week	32.0%	Used library computer	57.9%
Weekly	15.7%	Used a printer	20.2%
Monthly	6.3%	Met friends/someone else	17.3%
Less often	3.5%	Used own computing device	16.4%
First time here	1.3%	Studied/worked in group	14.7%
		Looked for library material	12.1%
		Borrowed/returned material	9.5%

（2008年度ワシントン大学学部図書館統計）

4.「閲覧」から「学習支援」へ

＜米国大学図書館の発展経過＞

●インフォメーションコモンズ

1990年代、米国大学図書館は、インターネットの普及や入館者数および資料の貸出冊数が減少に危機感を持つ

インフォメーションコモンズを創出：多数のPC等のメディア機器を備えた学習空間

●**インフォメーションコモンズからラーニングコモンズへの発展**

＜ラーニングコモンズの要件＞

①長時間快適に過ごせる環境である。
②デジタルリソースを活用できる。
③グループ学習ができる。
④コンピュータ、プリンタ、マルチメディア編集機器を使用できる。
⑤様々な技術スタジオを使用できる。
⑥コンピュータヘルプサービス、レファレンスサービスの両方を受けられる。
⑦インフォメーションリテラシー講習が受講できる。
⑧教員組織、学内の学生支援組織と連携したサービス提供を行っている。
⑨レポートや論文作成のサポートが受けられる。

●**ラーニングコモンズとは**

ラーニングコモンズ ＝ ライブラリー ＋ テクノロジー
＋ ライティング

人を介したサービス ＝ レファレンス（情報検索サポート）
＋ コンピュータヘルプ
＋ ライティングヘルプ

図書館のサービスモデルが「閲覧」から「学習支援」へ移行
⇒伝統的な図書館がラーニングコモンズへと進化する段階

●**ライティングセンター**

概　　要：全米の大学に一般的に設置。学部学生・大学院学生がチューターとして、主に学部学生を対象に論文等の作成支援を行う。
サービス内容：論文に限らず、就職活動時の履歴書、エッセイ等にも対応。

●**その他の取り組み**

1）情報検索講習会

米国大学図書館では、日本の大学図書館で一般的に行われている正課授業の１コマを利用した情報検索講習会も、日本ほど多く行われていなかった。

いつでも、どこでも、必要なときに必要なことを答えられるライブラリアンが充実しているので、必要ないのかも知れない。

2）他部署との協働

米国大学図書館には数百台単位のコンピュータが設置され、その管理は、大学内のコンピュータ関連部局が担っている。また、ラーニングコモンズでコンピュータヘルプを担うのもコンピュータ関連部局の学生アルバイトである。

以上

［本学図書館取組事例報告］

立教大学図書館における学習支援

図書館学系図書館課課長
小林 真理 氏

河野　では、続きまして、「立教大学図書館における学習支援」というタイトルで、図書館学系図書館課課長の小林さんにお願いします。では、よろしくお願い致します。

小林　図書館の小林と申します。私は、この３月まで小坏さんと同じ利用支援課におりましたので、立教大学図書館における学習支援ということでお話をさせていただきます。前半で、学習支援の前提として、いったい立教大学の図書館はどんなふうに利用されているのか、ちょっと見にくい小さな表になってしまいましたが、お手元にも資料がありますので、こうしたデータからお話をさせていただき、それに基づいてどんな学習支援をしているのかをお話しさせていただきます。

本学図書館の入館者数

まず入館者数です。ここ３年間の入館者数の合計を、１年間にいったい何人ぐらい入館者があったのかを表にしました。この表はお手元の資料にもあります（p.41参照）。総数で66万、70万、75万と順調に増えてきています。実は、立教大学に在籍する学生数も１万７千、１万８千、１万９千と増えてきていますので、当然の結果といえるのではないかと思います。ちなみに、その在籍者数で入館者数を割りますと、だいたいどの年も39程度になりますので、ここに出ている入館者数は学生以外の入館者も含んではいますが、１人の学生が１年間に39回ぐらい、学内のどこかの図書館に行った計算になります。我々の実感としまして、図書館

は非常に混んでいるというか、学生が多いです。立教大学の図書館は、座席も足りない、施設が非常に貧弱な図書館でして、入館者数というものはそもそも図書館がいっぱいだと、もうそれ以上人が入ってこないという宿命があります。それなのにこんなにどんどん人が増えてきて、人があふれているというのが実感です。他所の大学さんに伺うと、中には立派な図書館施設があるのに、学生の姿があまりないという大学もありますが、立教大学は幸か不幸か、施設的に非常に貧弱な所へ、みんな図書館に来る。ですので、大昔は「図書館って試験期だけ混んでいるでしょ」という印象があったと思うんですが、今はもう 4 月から混んでいます。以前は「 6 月になると図書館が混む」と言っていた時期があり、そのうち「 5 月から混んでいる」。今はもう 4 月から混んでいまして、お昼を過ぎるといっぱいという状況です。

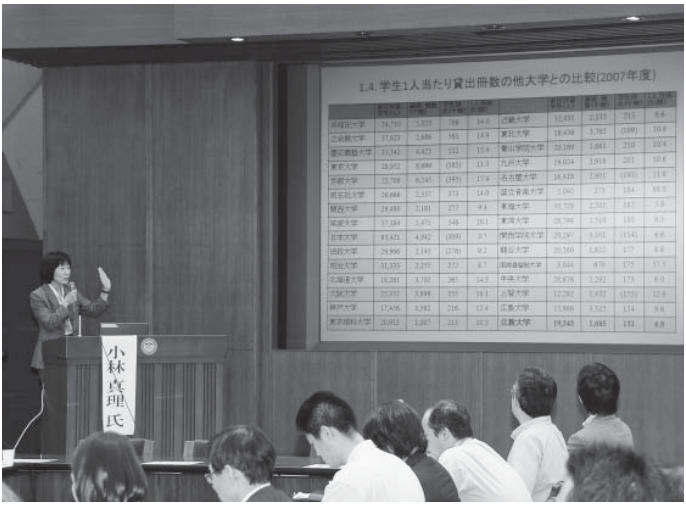
本学図書館の貸出冊数

貸出冊数という指標もありますので、ここ 3 年間の総貸出冊数を表にしてみました（p.42参照）。こちらの表はちょっと面白いんですけれども、この数字は学部学生 1 人当たり年間何冊借りたのかを計算してみました（p.43参照）。こちらは貸出冊数と言っても、図書だけに限っています。 1 年間に図書の貸出が何冊あったのか、例えば文学部の 1 年生は何人いるのか、その 1 年生が昨年度 1 年間に借りた本は何冊かということで、貸出冊数を在籍者数で割ってみたのがこちらの表です。グラフにするとこんな感じになりますが、学部によって非常に違っています。いろいろな学問分野にそれぞれ特性がありますから、本をいっぱい読まなきゃいけない学問分野もあるでしょうし、そんなことより実験だ、あるいはフィールドだ、あるいは身体表現だと、いろいろな学部が立教大学にはありますから、当然、学部によって違っています。異文化コミュニケーション学部は特徴的で、2008年度にはまだ 1 年生しかいなかったんですけれども、一人当たり14.1冊で、全学トップです。おそらく本をたくさん借りてレポートを書かないと単位が取れないという授業内容なのかなと、図書館では想像しております。本というと文系学部というイメージがありますけど、文学部よりも多いというところがポイントなのかなと思っています。グラフにするとこんな形です。こちらのグラフは毎年部長会でも図書館長からご報告しております。

他大学との比較

さて、立教大学の図書館の利用は他と比べるとどうなのかという視点で、ちょっと複雑な表をつくってみました。こちらの表もお手元の資料（pp.44-45参照）にございます。朝日新聞出版が毎年出している「大学ランキング」という本の、2010年度版ですと119ページに「学生への貸出冊数」の上位100位までというのが載っています。そのうちの30位までをこちらに書き出してみました。何故30位までかというと、立教大学が30位になっているからです。ところが、私は朝日新聞出版さんに不満があります。なぜかというと、このランキングは、学生への貸出冊数の生データそのままを多い順に並べています。当然、学生の数が多い大学が上位にきますよね。実際、１位は早稲田大学になっています。私はこの点が非常に不満だったので、学生１人当たりの貸出冊数を見るために、１位早稲田から１～30というふうに大学名としては並べましたが、ここに入っている数値は大学ランキングの数値ではなくて、お手元の資料のこの表の下に書いてあります出典で、日本図書館協会が毎年調査して出版している「日本の図書館」という統計データから抜きだしています。奉仕対象学生数、つまり在籍する学生数は何人なのか。図書館の規模を見るために蔵書冊数も入れてみました。そして、学生への2007年度１年間の貸出冊数。この数字は単位千冊で、早稲田さんは768千冊と特に多いんですが、学生への貸出冊数を奉仕対象学生数で割ってみました。早稲田さんの事例でいうと、768千冊を54,710人で割ってみると１人当たり14.0になります。「この表は何の順に並べたの?」「ちゃんと何かの順で並べなさい」と言われそうなんですが、順序としては先ほど申しましたとおり、「大学ランキング」のランキングの順になっています。

では１人当たりの貸出数が一番多いのはどこかというと、ぶっちぎりで国立音楽大学さんの88冊です。音大さんですので、図書館で楽譜の貸出をなさっています。楽譜というのは、私もビオラを弾いていますのでいつも苦労しているのですが、なかなか売っていません。楽譜を売っている所は本屋さんの数と比べたら圧倒的に少ないですし、市場のサイズが小さいですし、外国で出版されたものが圧倒的に多いですから、楽譜を個人で買うのは大変です。音大ではおそらく先生から、「何番と何番を弾いて比べてみろ」とか、「誰々の校訂した楽譜を使いなさい」などの指示がありますから、学生は楽譜を図書館に借りに行くわけです。で



すから、貸出冊数が圧倒的に多いんだろうと思います。では、楽譜を除いて考えるとどこが１位かというと、言わずと知れた国際基督教大学、57.5冊です。ICU（国際基督教大学）さんは図書館界では非常に有名なんですけれども、本を使って、図書館の資料を使ってレポートを書かないとやっていけない授業が大変多い大学だと聞いています。立教と比べて学部の数も非常に少ないですし、そういった授業が多い大学なのだと思うのですけれど、ここが実質的な１位です。

本学図書館の学習支援１：新入生図書館ガイダンス

さて今度は、立教大学図書館ではどんなことをやっているのかというところに入っていきたいと思います。まず１年生が入学してきますと、４月のオリエンテーション期間の中で図書館のガイダンスをやらせていただいております。240名程度入る教室に学部ごとに１年生に入ってもらい、パワーポイントを見せながら図書館の利用案内を配って、図書館の利用の仕方を説明しています。オリエンテーション期間のどこにどのオリエンテーションが入るかというのは、非常に組むのが大変で、学生部の方達はいつも苦労されているんですけれども、図書館としてもこれが非常に大きな違いになってきます。早い日程に図書館ガイダンスを

資料１

LIBRARY WEEK特別企画

図書館を巡って、
限定エコバッグをもらおう

立教大学図書館では、4月6日（月）～24日（金）の期間にLIBRARY WEEKを開催します（土日を除く）。
本号で紹介する図書館内の各コーナーを巡りながら、クイズに答えてみましょう。
GOALまでたどり着いた方には図書館オリジナルの限定エコバッグを差し上げます。新入生の方は、ぜひ積極的にご参加ください。
図書館の使い方は人それぞれです。自分なりの図書館の使い方を発見してください。

図書館本館 or 新座図書館へ行こう

1 START!
「図書館利用案内2009」と学生証の準備は出来ましたか？　図書館の入館ゲートを通るには学生証が必要です。図書館に入ったら、まず、「図書館本館利用案内」または「新座図書館利用案内」を1部手に取りましょう。利用案内に載っているマップを頼りに、これから紹介する各コーナーを巡ってみましょう。

2 閲覧カウンター
資料の館外貸出・返却手続き、書庫資料の出納、貸出期間の延長、

3 OPAC
OPACは図書館の資料を検索することができるオンライン蔵書目録

6 新聞コーナー
朝日・読売・毎日・日経の四大紙をはじめとする国内の新聞と、海外の新聞が閲覧できます。

新座図書館

入れていただいた年の図書館の利用者、学生の方々の図書館利用と、そうでなかった年の図書館利用は、全然違います。日程が早いほど参加率が高いものですから、参加率が高かった年の図書館利用は非常にスムーズです。聞いてくる質問内容のレベルに大きな差があります。今年の４月は非常に早い日程でやらせていただいて、大変良かったんですけれども、是非、今後もよろしくお願いしたいと思っております。そして、今年度は特に社会学部で、通常の図書館ガイダンスとは別に、さらに情報検索のガイダンスを、これは１年生全員を対象にした、人数が多い形だったんですが、ガイダンスをさせていただきました。

ガイダンスの中で、図書館に実際に足を運んでもらえればいいんですが、人数が人数ですので、何千人もの新入生が入ってきますので、それを図書館に全部連れて行くのは物理的に不可能なものですから、こういう企画を今年はやってみました。「図書館を巡って、限定エコバッグをもらおう」（**資料１**参照）というものです。ガイダンスが終わった後で図書館に来て、１番、２番、３番……10個くら

い項目があるのですが、そこに「行ってみよう」と、オリエンテーリングのようなことを各自やってもらい、全部訪ねるとエコバッグがもらえるという企画で、新入生に図書館に来てもらおうという企画を、今年はやってみました。

本学図書館の学習支援２：情報検索講習会

そして、めでたく入学された後、これからの先生方のお話に出てきますけれども、授業内の情報検索講習会というものを、図書館ではもう何年も前からやっております。お手元の資料の３ページ目になりますが（p.46参照）、年度を追うごとに参加人数がどんどん増えている。１年生は4,000人ぐらいいるわけですけど、ほとんどの人が受けていると言えるくらい、数の上では充実してきています。授業の１コマに図書館員が伺いまして、学生が１人１台パソコンが使える環境で実習をしながら、いろいろな情報の特性、図書と雑誌と新聞とインターネット等の情報源はいろいろと違うという話であったり、本の探し方、雑誌・論文の探し方、余裕があればデータベースの使い方などを、実習をしながらお話ししています。先生方にお申し込みいただいて実施するという形にしていますので、いくつかの学部では必修の授業の１コマに入れていただいている学部もある。そうでない場合もご希望の先生方に申し込んでいただいて実施しておりますので、困ったことが起きています。１人の学生が必修の授業でも授業内情報検索講習を受けたけれども、別な全カリの授業でやはり同じ内容を聞いてしまうということが、実は起こっているんです。これには困っていまして、臨機応変に内容を変えられればいいんですが、そういう人ばかりでもないわけです。１クラス50人とか40人とかの中で、「僕２回目なんですけど」という人もいたり、初めての人のほうが多かったりということで、そこが困った点です。逆に言えば、立教大学の初年次教育として、どの学部も全員１回必ず受けるという形にできれば、「僕３回目なんですけど、受けるんですか」みたいなことが無くせるのではないかと思うんですけれども、そこは課題かなと思っております。

ちょっと古いデータですが、2004～2006年の各年度の前期の貸出冊数をまとめてみたことがあります。授業内情報検索講習会の開催が少なかった学部の方々が利用する学系図書館Aと、多かった学部の方が利用する学系図書館Bの貸出冊数を較べてみました。館Aでは2004、2005、2006と年を追うに従って貸出冊数が

減っています。館Bのほうは同じ期間で、貸出冊数が631冊から906冊に増えています。

本学図書館の学習支援３：図書館活用講座

それから、例えば授業内情報検索講習会を「僕、風邪で休んじゃったんです。何とかならないでしょうか」という場合、図書館活用講座という、図書館独自の講習会をやっております。レベル分けを本年度は３段階でやっておりまして、OPACの使い方が１番。それから、２番目は雑誌記事の探し方。学生はまず本と雑誌の違いがわかりませんので、そこを強調しているんですけれど、本の探し方と、雑誌・論文の探し方は違います。学生は、雑誌論文を探すのにOPACを検索して「ないんですけど」と言ってくる場合もありますから、「そうじゃなくて…」という話をじっくりしております。そして３番目のオンラインデータベースの回では、特定のデータベースであったり、いくつかのデータベースを紹介したりします。これらを「図書館活用講座」と銘打ちまして、学生が個人で、グループでもいいんですけれども、自主的に図書館に申し込んでもらう形でやっておりまして、こんな形で案内をしています（次ページ**資料２**参照）。これは今年の６月のものです。そして特典があります。１番を受けた方には景品をあげます。消しゴムなんですけれど。２番まで受けた人は、学部生でも書庫に入っていいですよ。図書館本館には書庫がありまして、そこは普段は学部学生は立ち入れないんですけれど、この講座を受けた人は入れます。そして３番まで受けた人は、講習会室にパソコンが置いてありまして、そこを利用できるという特典を付けて、案内をしています。

資料 2

図書館活用講座（６月開催）

図書館では、皆さんの学習の一助となる講座（全３回シリーズ）を開催します。参加者にはさまざまな特典を用意します。

《講習の種類》	《参加特典》
①OPAC講習会（本の探し方）	①　→記念品進呈（図書館オリジナル消しゴム）
②雑誌記事論文検索講習会	①＋②→図書館本館書庫への入庫
③オンラインデータベース講習会 レポート作成・著作権理解	①～③→講習会室の利用

6月の講習③は、外部講師を招いてオンラインデータベースを詳細にご紹介します。
後半の時間に、図書館スタッフから「レポート作成・著作権理解」についてお話します。

法令・判例を検索してみよう！ ……▶ 6月17日（水）TKCローライブラリー
海外のニュースを読もう！ ……▶ 6月19日（金）Lexis-Nexis Academic
海外の雑誌記事を読もう！ ……▶ 6月23日（火）ProQuest ARL
日本経済社がもつ情報を入手しよう ……▶ 6月24日（水）日経テレコン21
海外の学術情報を入手しよう！ ……▶ 6月26日（金）Ebsco-host

※図書館活用講座は、本学学部学生を対象としたプログラムです。（定員：15名）

本学図書館の学習支援４：ラーニングアドバイザー

そしてラーニングアドバイザー、これが昨年度後半から新しく始めたことなんですが、先ほど小坏さんからお話があった、まさに人的サービスです。ラーニングコモンズへの第一歩というつもりでやっています。博士後期課程の大学院生の方に、今日もお１人みえているんですが、アドバイザーとして図書館に常駐していただき、学生からのいろいろな質問に答えていただく。データベース資料なども使いながら、ライティングセンターというお話もさっき出てきましたけれども、レポート・論文を書くためのアドバイスもしていただいています。どんな質問がくるか。例えば、「外食産業について卒論を書きたいのですが、資料の探し方は？」というものがありました。こういう今までの、いわゆる図書館でやっている、レファレンスにピッタリはまるような質問もきています。もちろん、図書館にはレファレンスのカウンターが別にありますので、そこで聞いてもらってもいいんですけれども、図書館の人にまで聞くのもねという場合。でも、同じ学

生で大学院生の先輩にちょっと聞いてみようかなという方は、ラーニングアドバイザーの所に行くというわけです。こちらの例も、「Jポップとは何かを読んでレポート書かなきゃいけないけど、どうやって書いたらいいでしょう」、そして「ゼミに応募するのでレポートを書かなきゃいけないんですけど、文献の探し方とレポートの書き方を教えてください」、「レポートを書く課題が出たんですけど、今まで何も書いたことがなくて、書き方がわからないんです」という質問が、実は非常に多いです。始まる前は、学生がどんなことをラーニングアドバイザーに聞いてくるのかわからなかったんですが、実際にこういう質問が出てきて、いわゆるレファレンス、「こんなことを調べたい」という文献の探し方だけでなく、レポートの書き方について、「どうやって書いたらいいんでしょう」「何から始めたらいいんでしょう」という質問が非常に多いので、今までこういったところが、なかなか図書館員には相談してもらえなかったのだと思います。優しいお兄さま、お姉さまに学生が聞きに来ていますので、この制度を始めて良かったし、また、ラーニングアドバイザーの方々も非常に熱心にやっていただいていて、大変感謝しております。

学習環境の整備

いろいろなサービスを展開すると共に、私達図書館としては、学習環境をなんとか整備したいと、いろいろやってきました（p.47参照）。開館の拡大ということで言えば、例えば、お手元の資料にも書きましたけれど、開館日を増やす。図書館は年間、今年は324日開いています。入試期間と夏の一斉休暇とか年末年始に若干閉まるくらいで、ほとんど毎日開いている。そして夜も、遅い館では10時半までやっている。試験期間になると早朝開館もしています。施設の充実、これは図書館の努力でという話ではありませんが、座席数もなんとか増やした部分もあれば、他の部署にとられてしまった部分もありと、なかなか進みませんので、今後、新中央図書館が計画されています。それからメディア機器の充実、たとえばパソコンを増やすということです。図書館の努力としても、ちょっとずつ増やしてはいるんですが、つい一昨日、メディアセンターが学内のいくつかの場所で、学生にノートパソコンを貸し出すというサービスを始められまして、図書館の本館の 3 階でも50台貸しています。まだ始まったばかりなんですけれども、これか

らどんどん利用が増えると思っています。さらに、図書館の中にシラバスに掲載されている図書を、今までも買っていたんですが、さらにもう１セット追加して、まとめて設置するということもしております。軽読書のコーナーも設けていますし、それから夏休み読書企画というのを去年初めてやりました。夏休みに本を読もうという企画で展示などもしています。

今後の課題

今後の課題ですが、いろいろなプログラムをやっていますので、なかなか効果の検証というのは難しいんですけれども、いろいろな形で検証していかなければいけないでしょう。学部等の教育との連携、協働ということもしていかなければいけない。そして、なんとかラーニングアドバイザーを、今は図書館本館だけ、平日の午後だけという形でやっていますが、新座の図書館にも設置したいし、時間も拡大したいとも考えております。以上です。

配布資料

立教大学図書館における学習支援

2009年 6 月17日
学系図書館課
小林　真理

1．立教大学における図書館利用の概況

1.1. 入館者数

	2008年度			2007年度			2006年度		
	開館日数	入館者数	1日平均	開館日数	入館者数	1日平均	開館日数	入館者数	1日平均
図書館本館	316	254,163人	804人	316	247,569人	768人	317	236,804人	747人
新座図書館	316	114,453人	362人	310	96,838人	306人	311	85,478人	275人
人文科学系図書館	316	102,012人	323人	316	102,732人	319人	317	129,176人	407人
社会科学系図書館	316	250,375人	792人	316	226,463人	703人	317	174,785人	551人
自然科学系図書館	258	31,254人	121人	256	32,592人	125人	261	36,990人	142人
計	—	752,257人	—	—	706,547人	—	—	663,812人	—

1.2. 貸出冊数（全利用者）

	2008年度		2007年度		2006年度	
	貸出冊数	1日平均	貸出冊数	1日平均	貸出冊数	1日平均
図書館本館	91,796冊	290冊	82,164冊	260冊	82,559冊	260冊
新座図書館	36,846冊	117冊	24,452冊	78冊	22,519冊	72冊
人文科学系図書館	19,158冊	61冊	15,897冊	50冊	19,104冊	60冊
社会科学系図書館	26,273冊	83冊	23,016冊	72冊	23,460冊	74冊
自然科学系図書館	3,769冊	15冊	3,081冊	12冊	2,634冊	10冊
新座保存書庫	5,608冊	—	4,580冊	—	4,308冊	—
計	183,450冊	—	153,190冊	—	154,584冊	—

1.3. 学部学生一人当たりの年間貸出冊数（2008年度）※図書のみで算出

所　　属	学部1年	学部2年	学部3年	学部4年	全学年
文学部	7.1	9.2	12.8	10.5	9.9
経済学部	4.0	3.7	4.6	3.0	3.7
理学部	2.3	5.6	4.4	5.3	4.3
社会学部	3.8	6.3	8.8	8.5	6.9
法学部	3.8	2.8	6.0	3.8	4.1
経営学部	2.5	3.5	6.2	—	4.0
異文化コミュニケーション学部	14.1	—	—	—	14.1
観光学部	5.1	5.0	6.4	4.2	5.2
コミュニティ福祉学部	4.4	4.3	6.6	5.8	5.2
現代心理学部	5.7	7.9	0.0	0.0	8.0
全学部	4.8	5.6	7.9	5.9	6.0

1.4. 学生1人当たり貸出冊数の他大学との比較

朝日新聞出版「大学ランキング2010」p.119「学生への貸出冊数」上位30位までを表にした

※「大学ランキング2010」は学生への貸出冊数そのものを較べているため、学生１人当たりの貸出冊数を日本図書館協会の統計「日本の図書館」から算出した

No.	大学名	奉仕対象学生（人）	蔵書冊数（千冊）	学生貸出（千冊）	1人当貸出（冊）
1	早稲田大学	55,010	4,945	768	14.0
2	立命館大学	36,466	2,615	561	15.4
3	慶応義塾大学	32,509	4,136	512	15.7
4	東京大学	28,966	8,587	(385)	13.3
5	京都大学	22,758	6,218	(395)	17.4
6	同志社大学	26,502	2,273	373	14.1
7	関西大学	29,442	2,089	277	9.4
8	筑波大学	16,876	2,457	346	20.5
9	日本大学	80,751	4,700	(309)	3.8
10	法政大学	30,148	2,145	(276)	9.2
11	明治大学	31,199	2,204	272	8.7
12	北海道大学	18,264	(3,789)	265	14.5
13	大阪大学	20,738	3,268	255	12.3
14	神戸大学	17,702	3,491	216	12.2
15	東京理科大学	20,445	1,006	213	10.4
16	近畿大学	32,140	2,091	215	6.7
17	東北大学	18,441	3,727	(199)	10.8

No.	大学名	奉仕対象学生（人）	蔵書冊数（千冊）	学生貸出（千冊）	1人当貸出（冊）
18	青山学院大学	20,198	1,625	210	10.4
19	九州大学	19,024	3,846	201	10.6
20	名古屋大学	16,456	2,884	(193)	11.7
21	国立音楽大学	2,155	268	184	85.4
22	東海大学	27,823	1,988	182	6.5
23	東洋大学	28,171	1,285	180	6.4
24	関西学院大学	20,342	1,786	(134)	6.6
25	龍谷大学	20,200	1,783	177	8.8
26	国際基督教大学	3,063	658	175	57.1
27	中央大学	28,113	2,245	173	6.2
28	上智大学	12,192	1,414	(155)	12.7
29	広島大学	15,768	3,281	154	9.8
30	**立教大学**	**17,875**	**1,657**	**131**	**7.3**

出典：日本図書館協会「日本の図書館2007」（2008.1.刊行）、
「日本の図書館2008」（2009.1.刊行）
奉仕対象学生数…2007.5.現在、蔵書冊数…2007.3.現在、
学生貸出冊数…2007年度実績
※数値が（　）に入っている部分は、大学全体の合計数を直接回答していないため、合計を算出した

2．立教大学図書館における学習支援

2.1. 新入生図書館ガイダンス（オリエンテーション期間中に実施）

240名教室でPPTと「図書館利用案内」により、立教大学図書館の利用のしかたを説明

日程が早い程参加率が高い→参加率が高い年の図書館利用はスムーズ（質問内容のレベルに差）

2009年度の社会学部はオリエンテーションの一環として、1年生全体を対象に「情報検索」ガイダンスを別途（図書館ガイダンスとは別に）実施した

2.2. 授業内情報検索講習会

年　度	参加人数
2004年度	600人
2005年度	900人
2006年度	2,500人
2007年度	3,500人
2008年度	3,800人

主な講習内容

・情報資源の特性と使い方
・立教大学図書館の蔵書検索方法（OPACの使い方）
・NACSIS Webcat，Webcat Plusの使い方
・雑誌論文の検索方法と入手方法
・オンラインデータベースの使い方（「日経テレコン」など）

学部・大学院の授業の1コマをPC教室で行ない、図書館員が講師を務め実習形式で講習

１年生全員が履修する科目で実施する学部あり（経済、法）

学部の授業と全カリの授業とで、同じ講習会を重複して受講する学生が出てしまう

2.3. 図書館活用講座（図書館主催の講習会）

①OPAC講習会

主に図書のOPAC検索と入手、図書館の使い方について学ぶ

②雑誌記事論文検索講習会

OPAC検索を前提に、雑誌記事の検索と論文の入手について学ぶ

③オンラインデータベース講習会（DBごとに開催する場合も）

新聞DBや、その他個別のDBについて（提供元から講師派遣も）、検索手法を詳しく学ぶ

2.4. ラーニングアドバイザー

博士後期課程の大学院生が、アドバイザーとして図書館に常駐

図書館の資料やオンラインデータベースを用いながら、学習に関する質問に応答

レポート・卒業論文作成のためのアドバイスもしている

「ラーニングコモンズ」への第一歩

3．学習環境の整備

開館の拡大……開館日の拡大、夜間休日開館、早朝開館

施設の充実と限界……閲覧座席増設、閲覧室の割譲、グループ利用施設の不足

メディア機器の充実……PC増設、メディアセンターによるPC貸出

シラバス掲載図書の追加設置、軽読書コーナー開設、夏休み読書企画

4．今後の課題

プログラムの効果の検証

学部等の教育との連携と協働

ラーニングアドバイザーの拡充

以上

［図書館を活用した授業実践報告１］

初年次教育における図書館の活用と学習支援

―「授業内情報検索講習会」を中心に―

経済学部助教
谷ヶ城 秀吉 氏

河野　それでは、少し時間が押しておりますので、引き続き「初年次教育における図書館の活用と学習支援－「授業内情報検索講習会」を中心に－」ということで、谷ヶ城先生にお話いただきます。

情報収集能力の取得を目的とした「授業内情報検索講習会」の利用

谷ヶ城　経済学部の谷ヶ城と申します。私に与えられている時間は10分ですので、なんとか10分で終わるようにお話したいと思います。まず経済学部の初年次教育から紹介させていただきます。経済学部では、大きく分けて「基礎演習」と「情報処理入門」の２つの授業を初年次教育として行っております。どちらも自動登録ですので、すべての１年生がこちらの授業を受講する形となっております。細かい授業内容は省略しますが、いずれの授業も助教が中心的な担い手となっているという特徴があり、「基礎演習」でスタディ・スキルを、「情報処理入門」で情報リテラシーを学ぶということになっております。この話と今日のテーマである図書館の話がどこで結びつくのかと申しますと、情報リテラシーのうち、情報収集能力の習得を目的として図書館の情報検索講習会を利用しているということです。ここには２つの目的がありまして、１つは「基礎演習」で最終レポートを作成するための必須スキルである図書館利用スキルを身につけて欲しいということがあります。もう１つは、経済学部ですから統計情報ですとか財務情報のデータを１年生のうちに取得できるようになって欲しいということがありまして、こちらは基本的にオンラインデータベースの使い方を学んでいきます。こうしたス

キルを育成していこうということで、毎年、図書館と協力して情報処理の授業内に情報検索講習会を開催しております。図書館利用スキルの獲得を目的とした授業内情報検索講習会の開催は、他大学でも既にいくつかの先行事例がありまして、かなり高い効果が認められています。講習会の内容は、先ほど図書館の小林さんの方から細かくお話いただいたので、私のほうでは内容の紹介を省略します。講習の内容はいくつかのプログラムが事前に設定されていまして、我々のほうがこれをチョイスする形になっております。例えば、今回チョイスしたものの１つとしては、Webcat Plusがありまして、これは図書館のほうでは２年生が受講すべき講習科目としているのですが、先ほど述べましたように、レポート作成の必要上から今回の講習内容に含めているわけです。もう１つ選択したのは、こちらも本来は２年生を対象とするオンラインデータベースの実習ですが、日経テレコン、EDINET（エディネット）の利用スキルを、なるべく早い段階で取得してもらいたいということで入れております。EDINETというのは、有価証券報告書をWeb上で入手できるというものですが、「基礎演習」のレポートで、身近な経済的事象である企業活動をテーマに選択する学生が非常に多いという実情があります。それで財務情報など基本的な企業データを入手してレポートを作成して欲しいということがありまして、オンラインデータベースの講習も選択したわけです。

開催時期ですが、昨年は比較的遅い6月第1週に開催しましたが、今年は少し早めて4月第4週に行っております。と申しますのも、先ほど、図書館の方からもお話がありましたけれども、なるべく早い段階で図書館の使い方を習得してもらうということで、今年から4月中の実施に変えました。早い段階で情報収集能力が育成できれば、リーディングやライティングにフィードバックしやすいだろうというのが我々の意図であります。

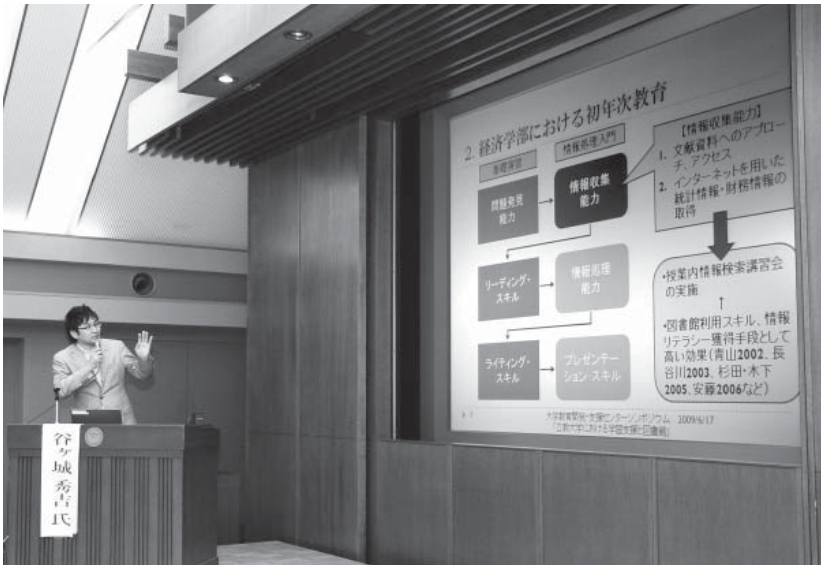
講習会後の図書館利用スキル状況

私が担当するクラスは136名が登録されているのですが、講習会から1ヵ月後に実施後アンケートをとり、授業内情報検索講習会に出席したと回答した108名を対象として、数値を掲げております。授業内情報検索講習会の受講態度ですが、基本的にあまり積極的ではない。概ね受動的、かつ消極的であることがわかります。これは、講習会にどういう意味があって、どういうメリットがあるんだということが今一つ私のほうで落とし込めていない結果なのかなと思っております。

講習会後の図書館利用スキルがどのようになったのかということですが、今、細かい数字を言っているとちょっと時間がありませんので、簡単に掻い摘んでお話しますと、まず、講習会後にOPACを利用して文献を取得した者がだいたい3割程度、31名いたということです。これが多いか、少ないかというのは、比べる数値がないのでわからないのですが、だいたい3割ぐらいの学生が実際にOPACを用いて図書館から文献を借りたということです。このアンケートは5月の末にとりましたから、それから2週間ほど経っておりますので、実際に借りた学生は現時点ではもう少し多いのではないかと思います。

検索のハンドリング、つまりパソコンを使った検索スキルは、授業内講習会を開催することでかなり向上するということが先行事例の成果でわかっているのですが、ここでもやはり非常に高い効果と申しますか、だいたい使い方はわかったという学生がほとんどとなっています。

先ほど、雑誌の話が少し出てきましたけれども、学生がレポートを作成する場合に、本だけではなくて、雑誌記事や論文からも情報を拾って欲しいと考えております。ですので、NDL-OPACを用いて雑誌記事を検索して欲しいということで、講習会でもこれを促すんですけれども、意外に習得率が低いなと。この辺が



まだあまり動機付けされていないのかなという部分が見てとれるわけです。

次にオンラインデータベース、レファレンスの認識、あるいは利用頻度についてですが、先ほど申しましたEDINETですとか日経テレコンの利用者はわずかに存在するということです。おそらく高校生の時に彼らはこういったデータベースがあることを知らなかったと思うので、少しでも利用を促すことができたかなとは考えております。また、オンラインデータベースのハンドリングスキルの習得率も非常に高いので、こちらのほうでもう少し動機付けをしてあげれば、実際に利用するのかなとは思います。

山手線コンソーシアムですが、認知度は非常に高いのですが、知ってはいるけれども、１年生ということもあって、よその図書館まで行って本を借りるというところまではまだ進んでいないというのが、現状なのかなと思っております。図書館のレファレンスは、そもそも認知度自体が非常に低い。情報検索の講習会でしたので、図書館のインストラクターの方はレファレンスの話をあまりされなかったと記憶していますが、認知度も非常に低いと。かつ利用もほとんどされていないということであります。

最後に講習会の有効性についてですが、約40%の学生が図書館の利用と「基礎

演習」のレポートの関連性を理解していまして、講習会自体の意義も積極的に評価しております。ただし、約半数が「どちらともいえない」ということで、評価を留保しています。彼らがなぜ評価を留保しているのか、細かい内容まではちょっとわからないのですが。また、約80%以上の学生が講習会は必要だと言っています。しかし、実際には見るからに飽き飽きしている学生がいるわけです。話を聞いてみると、こんなのやったと。アンケートの自由記述でも、他の授業でやったので2回は必要ない、というのがかなりおりました。講習会そのものは必要とされているだけに、この辺の組み立て方はちょっと考えなければいけないなと考えております。

今後の課題

最後に今後の課題ですが、検索ハンドリングに関しては今後も非常に高い効果が期待できるのですが、それが実際の図書館の利用につながるかというと、必ずしもそうとは言えないという問題がございます。これは、初年次教育の授業内において図書館を利用する意味やメリットが十分に伝えきれていない結果なのかなと思います。ですから、図書館利用の何らかの動機付けをしてあげる必要があるだろうと思います。これもアンケートの自由記述ですが、講習会はとても効果があったと、なぜなら「基礎演習」のレポートを作成する前に検索の仕方をはじめとする図書館の利用方法が学習できたからだという回答があります。先ほど、国際基督教大学は図書館を利用しなければいけないような環境に学生が「追い込まれている」という話をおっしゃっていましたけれども、我々も図書館という資源を最大限に利用した授業の組み立てをする必要があろうかと思います。

また講習会内容のカスタマイズに関する問題ですが、「カスタマイズ」とは言っても、もともと図書館のほうで準備してあるプランを我々がチョイスするということですから、これから経営学部の高岡先生がお話されるような、本当の意味のカスタマイズには至っていないという問題もあります。大学における4年間の学習を通じて1年生の段階ではどの程度の図書館スキルが必要なのか。2年生以上の図書館利用を促進する教育はどうするのか。相互をどう接合すればいいのか。こうした議論がされないと、初年次教育の段階において習得すべき図書館利用スキルのレベルは明確になりませんし、講習会のカスタマイズも困難だろうと

思います。

　最後に他科目が実施する講習会との関係ですが、図書館利用スキルを向上させる手段として授業内講習会の効果が高いというのは、だいたいどの先生もご存じなので、いろいろな科目で講習会が開催されることになるのですが、そうすると学生の立場から見れば、講習会を 2 回、 3 回やることになる。学生に対しては逆効果になってしまうという問題があります。ですから、講習会の開催はもちろん必要なのですが、誰がそれをプランニングし、誰が管理するのか、どういう内容が効果的なのかを少し考えなければならないと考えています。以上で、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

配布資料

初年次教育における図書館の活用と学習支援
―「授業内情報検索講習会」を中心に―

2009年 6 月17日
経済学部助教
谷ヶ城　秀吉

1．はじめに

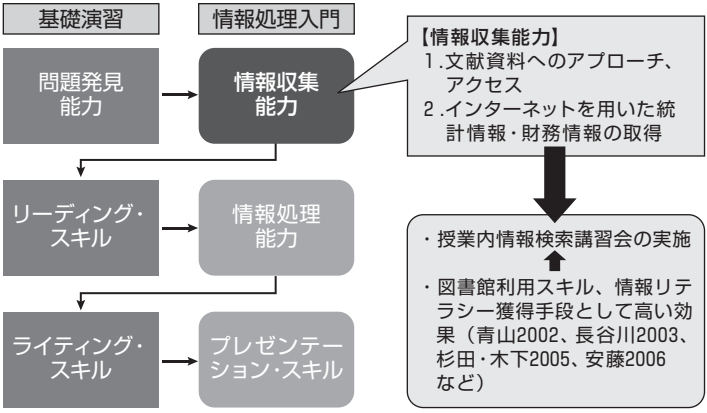
▶経済学部の初年次教育（全学科共通）

1．基礎演習：初年次に大学生としての必要な一連の作業を経験する。
- ▶１クラス×20名×32クラス
- ▶教授１名、助教７名、兼任講師８名が担当
- ▶半期２単位、自動登録

2．情報処理入門1･2：情報処理能力を身につける。
- ▶１クラス×65名×11クラス
- ▶（教授２名）、助教７名が担当
- ▶半期２単位×２、自動登録

→助教を中心的な担い手とし、スタディ・スキルと情報リテラシーの育成を初年次教育の主たる課題としている。

2．経済学部における初年次教育



3．授業内情報検索講習会

▶講習会プログラムを経済学部向けにカスタマイズ

講　習　内　容	所要時間	実施内容	備　考
立教大学図書館の蔵書検索方法・実習	20	○	検索するキーワードは事前に設定。
雑誌記事の探し方（NDL-OPAC・CiNii）実習	20	○	
山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムの説明	10	○	
WebCat Plusの使い方・実習*	20	○	
オンラインデータベース実習*	15	○	日経テレコン21 EDINETを使用
図書館見学**	15	×	

*は２年次で習得すべきスキル。**はオプション。時間は分。

▶開催時期：６月第１週→４月第４週

▶情報収集能力の早期育成→リーディング・スキルへのフィードバック

4-1．実施後アンケート

▶講習会開催の４週間後（2009年５月23日）に実施。

▶報告者が担当する２クラス

▶履修者：経済学科１年次136名

▶回答者：　　〃　　122名

▶分析対象：「授業内情報検索講習会に出席した」と回答した108名

どういう心構えで「授業内情報検索講習会」を受講されましたか？（複数回答）	
単に授業の延長として受けた	65.5%
何を学習するのか全くわからない状態で受けた	13.8%
情報の検索方法をしっかり学ぼうと思って受けた	8.6%
授業や自分の研究に生かそうと思って受けた	12.1%

→受講態度はおおむね受動的、消極的。

4-2. 図書館利用スキル

	はい	いいえ
講習会後、「OPAC」（図書館の蔵書検索システム）で本や雑誌を検索したことがありますか？（無回答は除く）	37.0%	56.5%
検索した後、その本や雑誌を実際に入手することができましたか？	77.5%	22.5%
検索キーワードの入力方法はわかりますか？	97.5%	2.5%
本の検索結果の画面の見方はわかりますか？	97.5%	2.5%
雑誌の検索結果の画面の見方はわかりますか？	90.0%	10.0%
書庫にある本や雑誌の請求方法はわかりますか？	67.5%	32.5%
「請求メモ」の書き方及び、出力方法はわかりますか？	65.0%	35.0%
立教大学に無い本や雑誌を検索したことはありますか？	40.0%	60.0%
NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索システム）、Webcat-Plus（国立情報学研究所蔵書検索システム）の使い方についてご存知ですか？	57.5%	42.5%

▶講習会後、OPACを利用し、実際に文献を取得したものは31人（28.7%）

▶検索ハンドリングのスキル育成には高い効果。

▶NDL-OPAC利用方法の習得率は意外と低い。

4-3. オンラインデータベース・レファレンス

	はい	いいえ
図書館ホームページから接続できる「オンラインデータベース」で資料を検索したことはありますか？（無回答は除く）	14.8%	74.1%
検索した結果、入手したい情報にたどりつくことができましたか？	81.3%	18.8%
検索キーワードの入力方法はわかりますか？	87.5%	12.5%
「ログアウト」のボタンを押して利用を終了していますか？	81.3%	18.8%
「山手線沿線私大図書館コンソーシアム」の制度をご存じですか？	60.2%	38.0%
「山手線沿線私大図書館コンソーシアム」協定校の図書館を利用したことがありますか？	5.6%	92.6%
図書館ではさまざまな「レファレンスサービス」（他館利用時の紹介状の発行、コピーの取り寄せ、現物貸借等）を行っていることをご存じですか？	22.2%	75.9%
「レファレンスサービス」を利用されたことはありますか？	2.8%	95.4%

▶データベース利用経験者はわずかに存在。ハンドリングのスキルは高い。

▶「コンソーシアム」の認知度は高いが、利用までには至らず。

▶「レファレンス」の認知度は低く、またほとんど利用されていない。

4-4.「講習会」の有効性

「授業内情報検索講習会」は基礎演習のレポート作成に役立ちそうですか？	
役に立ちそうだ	39.8%
どちらともいえない	52.8%
役に立たなそうだ	2.8%
無回答	6.6%

「授業内情報検索講習会」についてあなたのお考えをおうかがいします？	
もう少ししっかり聞いておけばよかった	20.4%
講習会は必要だ	61.1%
講習会は必要ない	7.4%
授業の時間を割いてまでやる内容ではない	10.2%

▶約40%が図書館の利用とレポート作成の関連性を理解し積極的に評価するものの、約半数は評価を留保。
▶約80%以上の学生が講習会を必要としている。
▶講習会に否定的な意見は「他の授業でもやったので2回は必要ない」。講習会そのものを不要としているわけではない。

5．今後の課題

1．検索ハンドリングに関しては高い効果。

▶ただし、すぐさま「図書館の利用」にはつながらない。

2．現状の初年次教育は学生に対して必ずしも「図書館利用」のインセンティブを与えていない。

▶図書館を利用する「場」を与えること

▶「基礎演習のレポート作成の前までに知っておいてよかった」
→「効果は実際はあったと思う」

3．「講習会」のプランニング

▶カスタマイズの精度→2年次以上のフォローアップ

▶他科目が実施する「講習会」との関係。

6．参考文献

▶青山弘［2002］「『授業と連携した』図書館ガイダンスの可能性―岐阜大学の事例を中心に―」『大学図書館研究』65。

▶安藤友張［2004］「大学における初年次教育と図書館利用者教育」『短期大学図書館研究』24。

▶――［2006］「大学における初年次教育と図書館利用スキル・情報リテラシーの育成―現状と課題―」『図書館雑誌』100(10)。

▶石川敬史［2006］「大学図書館の新入生オリエンテーション―情報リテラシー教育への位置づけとして―」『大学と学生』503。

▶太田潔［2008］「『初年次教育』にかかわる大学図書館の役割についての一考察―最近の動き―」『図書館雑誌』102(2)

▶杉田いずみ・木下聡［2005］「三重大学附属図書館における情報リテラシー教育支援―学部初期の『授業と連携した』講習会を中心に―」『薬学図書館』50(1)。

▶長谷川豊祐［2003］「情報リテラシーと大学図書館」『現代の図書館』41(3)。

［図書館を活用した授業実践報告２］

産学連携教育における学習支援と図書館

経営学部教授
高岡 美佳 氏

河野　４番目の提題者の方で「産学連携教育における学習支援と図書館」ということで、高岡先生にお願い致します。それでは、よろしくお願い致します。

国内インターンシップの事前研修

高岡　私のほうからは、谷ヶ城先生に引き続き、経営学部で図書館に学習サポートをお願いしている部分について話をしたいと思います。私の授業では２つの科目で学習サポートをしていただいており、１つはゼミです。ゼミは、今、谷ヶ城先生がお話くださったものと全く同じもの、つまり、オプションの中から選ぶ形の情報検索講習会で、話がかぶりますので、今日はもう１科目のほうをご紹介させていただきます。もう一つの科目は、国内インターンシップという科目です。国内インターンシップというのは別の言い方をすると、産学が連携して実施する人材教育です。産学連携という言葉は、ここ十数年流行っていますが、大別すると、産学連携で行う研究、つまり産学連携研究と、産学連携教育の２つに分かれます。産学連携研究は、私も以前行っていました。日立製作所やNTTなどと協力して、私達研究者が持っている要素技術やスキルを、企業が持っている設計・生産技術や販路と組み合わせて製品化します。そういうと難しく聞こえますがさほど難しくなく、元々互いに持っているものの組み合わせでできるものなんです。

一方で産学連携の教育は意外と難しい面があります。毎回企業からゲスト講師を招く形の寄附講座、あるいはこの国内インターンシップのような講座では、何

が難しいかというと、寄附講座にゲストが来て話を学生が聞く瞬間や、国内インターンシップ講座で実際に学生が企業に行って職業体験をする瞬間に、その前の準備ができていないと学習という点ではほとんど意味をなさないところにあります。この点を踏まえて経営学部では、インターンシップを行う際に、半期の時間をかけて事前研修をしています。その中身が、今日の話と絡んできます。

事前研修では、働くということはどのような意味があるのか、人生というのはどういうものなのか、そういったことから始まって、表面的なビジネスマナー、あるいは実習先が決まった場合には、その企業やその業界に関する事前分析をしっかりしていきましょうということを教えています。

ただし、ここで１つ問題が生じてきます。経営学部で用意している実習先というのは、小さな企業が多く、学生がGoogleとかYahooとか、あるいはOPACなどを使って検索をかけても、ほとんど引っかからないような企業なのです。雑誌もそうです。日経テレコンを使っても、記事が出てこない企業なわけです。それで困ってしまい、図書館の方にご相談に行った。これが今回のコラボレーションの始まりとなりました。

図書館とのコラボレーション

どうやって進めていったかというと、まず、相談に行きまして、その後、何度か打ち合わせをすることとなりました。企業・業界分析の回の授業の本番は５月25日だったので、５月14日にまず第１回目の打ち合わせをしました。その場で、今申し上げたような問題意識を図書館の方にお話しました。画面の写真は、気難しい表情で、図書館の秋山さんと河村さんと一緒に検討をしているところです。皆で、実際に図書館のパソコンで検索をかけている風景です。先ほどの谷ヶ城先生のレジュメの４枚目に出てきたような様々な検索ツールを用いて検索をしましたが、全く引っかからない。例えば、アーリーバードゴルフクラブという企業があるんですけれども、これはゴルフの練習場なんです。普通にGoogleで検索をかけると、ホームページは出てくるものの、利用料金などしか載っておらず、会社概要などは一切出てこない、営業用のホームページなんです。ですので、全くわからない。このような企業についてはどうしましょうという話をしたわけです。企業の創業の経緯や理念、資本金、従業員、ビジネスモデルがどうなってい

るかなんていうのは、どうやっても出てこない。そうであれば、企業ではなく産業の分析をしたらどうかということになりました。ゴルフ産業というのは、今言った練習場のようなもの以外にも、ゴルフウエアの製造・販売、これもゴルフ産業の一環となります。あるいはキャディさんのいるゴルフ場もゴルフ産業の一翼を担っています。まず産業構造を把握し、その中で練習場ビジネスがどのような位置付けになっているかを、省庁が取っているデータなどから数値的に把握するような産業分析の機会を事前予習として提供しましょうということになりました。企業で実習をする際に、電話１本取るときにも、それがわかっているのと、わかっていないのでは、全然意味が違いますので、良いのではないかということで、産業分析を行うことになったわけです。その辺りを全部ご相談しながら進めていきました。産業分析を行うとして、現時点でどのデータが図書館にあるのかを確認しました。次に、キャリアセンターも当然、就職のためにいろいろデータを持っているはずだという事実を図書館の方が気付いてくださって、その場で電話をかけて問い合わせをしてくださいました。立教大学の中で産業分析に関するデータは、現在、どこに、どれだけ存在するのかを確認したわけです。そのような作業をしながら、概要が徐々に固まり、当日の授業で使用するパワーポイント30枚程度の内容が決まっていきました。第２回目の打ち合わせで詳細を確認をして本番に臨みました。

画面は、当日の授業資料の一部です（p.69参照）。表紙には私と図書館の方々と合わせて４人の共同の名前が入っています。４人で授業をやりますという意味です。８号館のパソコン室を借りて授業を実施しました。皆さんのお手元の資料だと見にくいので、画面をご覧ください。ブルーのシートと白のシートがございます。このブルーのシートは私がしゃべった部分です。私の方から学生に対して、訪問する企業を探しても情報が見つからない場合は、産業分析をしなさいと。産業とはこのようなものを指します、という産業の概念説明から始まり、産業データ分析の方法を解説します。白のシートのほうは、当日、図書館の秋山さんが担当してマイクでお話くださった部分です。日本標準産業分類表の大分類で見ると、産業は、漁業などの第一次産業から始まって、運輸、小売、サービスに至るまで20産業あります、それが立教大学の図書館の分類上はこれに対応しています、といったふうに、学術的な産業分析手法から、資料の在処までつながるような形で進めていきました。谷ヶ城先生の報告の内容、つまり、今までの図書館の情報検

索講習が、いわば、スーツを買って、丈を身体に合わせて調整するといったタイプのカスタマイズだとしたら、今回の国内インターンシップの授業は、体形を測って注文で一から服をつくっていただくような完全注文生産の形です。この写真は、当日の授業風景です。私がマイクを持っている部分と秋山さんがマイクを持っている部分が写っています。こんな形で、黒板を使いながら、パソコンも使いながら、授業を進行しました。当日は、現物の資料も、四季報等その他全部ワゴンで 8 号館に運んできてくださいました。

授業後のアンケート結果は概ね好評

実施後、アンケートを取りました。図書館の方々が、学部で展開している授業と関連する知識や技術を持っているということに驚いたという学生が 4 分の 3 いたということがわかりました。実は、コラボレーション型授業が、通常の情報検索講習会よりもわかりやすいかどうかという点に関しては、全員から「はい」という回答が得られなかったのが、少々残念でしたが、その理由は、フリー記述欄に書いてある通り、あまりにもお互いに内容を詰め込んでしまったため、授業の展開が早すぎて途中で脱落してしまった学生が何名かいたからです。その辺りは反省し、次回は気を付けようと思います。あとは概ね好評で、報告資料に載せてあるように、「図書館の方々の豊富な知識を教員が整理して説明して補完し合っており非常にわかりやすかった」という感想に始まり、「職員の方が授業に参加するという姿勢に立教大学の教育に対する熱意を感じた」といった感想がありました。これ以外にも、図書館所蔵の資料について「知らなかったのでこれから活用したい」といった記述や「図書館の可能性の大きさに衝撃を受けた」というような記述が見られました。

コラボレーション型授業のメリットとデメリット

以上が経営学部の国内インターンシップで、図書館に学習サポートをしていただいた事例の報告です。残された課題としては、個人的な感想になりますが、先ほど小坏さんがおっしゃっていたように、もしも、今回の授業が、図書館内のスペースで行われていたら、授業が終了した瞬間に、学生が図書館の中を回遊して、

様々な資料を見たであろうと思いますので、資料の所蔵場所と離れた場所で行うというのは、８号館からだとほんの少しなんですが、そこで切れてしまう部分があるので、残念に感じました。また、ハード面ではなくソフト面としては、資料の３－２（p.72参照）に書いたように、コラボレーション型授業のメリットがある一方で、デメリットもあって、メリットは先ほど申し上げましたが、デメリットは１回の授業の事前準備に時間がかかる点です。今回は、打ち合わせ自体は２回でしたが、おそらく図書館側の３人、４人のご協力いただいた方々は、それ以外にもメールで高い頻度でやり取りをされていたと思いますので、ここまでカスタマイズしていただくことが日常化するのであれば、図書館の人員配置も考える必要があるのではないかと感じました。つまり、私が今回トライしたのと同様のことをすべての教員が求めたら、図書館の方は大変だろうなと思った次第です。さらに、もう１点付け加えますと、FDの観点からも、教員が自分の授業だからといってすべて囲い込んで一人で授業を組み立てるのではなく、ちょっと外側の視点、学内の関係者でありながらも普段私達の授業を見ていない職員の方に見てもらう形の授業をやることで、教員側も気付きを得ることが多いのではないかと感じました。例えば、「産業データはありますよね」と聞くと「産業データって具体的には何を指すのですか？」と返答され、そうか、産業データという言い方

は学生にそのまま言っても伝わらないな、といった技術的なことに始まり、より根本的な話をすると、教員と職員さんと間の役割分担は、どうあるべきなのか、を考えさせられる瞬間もありました。余談ですが、授業以外の部分においても常々感じます。こういう企画や書類は、別に教員が囲い込んでつくらず、職員さんにやってもらってもいいんじゃないかと思うようなことが良くあります。話を戻すと、授業に関しても、もう少し共同でできるような部分があるのではないかなというのを強く感じたのと同時に、逆に、私達が責任をもってやらなければならない部分、残された部分というのはどこなのだろうということにも考えが及びました。標準化できる部分とそうでない部分、それは、やはり、研究をして、その研究の成果を教育にフィードバックし続けるというところが、研究者としての一面をもつ教員が、最後まで自分が責任を持って学生に教える部分なのかなと。そのような部分とそうじゃない部分というのが、通常の授業の中でどのように混ざっていて、今後、教員と職員がどのように分担できるのかなどということを考えて、すぐにはそういう時代は来ないかもしれませんけれども、これからもいろいろと一緒にやっていければいいなというふうに考えた次第です。

最後になりますが、今回、お手伝いいただいた秋山さんと河村さん、水上さん、小林さんにお礼を申し上げて、本報告を終えたいと思います。ありがとうございました。

河野　ご登壇いただきました皆様、ありがとうございました。ただ今を持ちまして、第１部を終了致します。皆様のお手元の資料の中に、コメントペーパーをご用意致しております。こちらに、ご意見、ご感想をご記入いただきまして、最後に、お出口の所で係の者が回収させていただきます。是非、一言、二言、書いていただきますと助かります。

配布資料

図書館を活用した授業実践報告

産学連携教育における学習支援と図書館

2009年 6 月17日
経営学部
高岡　美佳

1. 産学連携教育と学習プロセス

＞「国内インターンシップ」＝産学連携での人材教育

＞人材育成に資する実践的教育を効果的に行うために重要となるのは、「現場」前の授業デザインと予習、「現場」後の振り返り

＊事前研修（働くことの意義、ビジネスマナー、企業・業界研究etc.）

↓

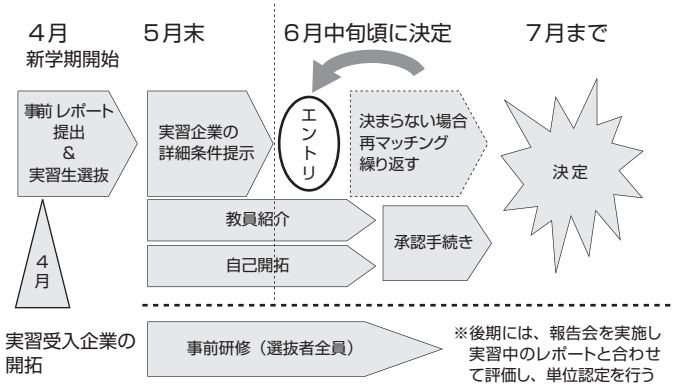
＊企業での実務体験

↓

＊キャリアプランニング・就業意識の向上
大学での学びの重要性の再認識

企業・業界研究etc.）→ 実習先企業の規模が小さいため、情報入手が困難

＜国内インターンシップ授業のスケジュール＞



2.「国内インターンシップ」における図書館講習会の活用

2.1　実施前

＜第１回打合せ＞

５月14日（木）10:00 ～ 11:00

授業の目的と全体の流れ、問題点を共有

企業分析・産業分析の手法に関する検討

図書館、キャリアセンター在庫資料の確認

＜第２回打合せ＞

５月21日（木）13:30 ～ 15:00

授業コンテンツの確認

第２回打合せ風景 in 図書館

2.2　授業での実施（５月29日）

①

経営学部　国内インターンシップ
2009年５月29日

「実習企業および実習企業等の業界研究」

高岡（経営学部）
秋山・河村・水上（図書館）

②

本日の概要
企業・産業分析の方法、
分析用データの収集を習得する。

Ⅰ　業界・業種分析
　１. 分類
　２. 分析方法
　　（1）産業構造
　　（2）分析視角
　　（3）データによる比較
　　（4）経済活動分析

Ⅱ　企業分析
　１. 企業を探す
　２. 分析の切り口
　　(1)企業の歴史　(2)理念･社風　(3)事業内容と戦略
　　(4)財務状況　(5)人事政策

③

Ⅰ　業界・業種分析

1．分類

2．分析方法
　（1）産業構造の分析
　　産業別データによる比較
　　経済活動データによる検証
　（2）産業特性（制度・慣行）の分析

④

1．産業の分類

日本標準産業分類表
（平成19(2007)年11月改訂）

A　農業	K　不動産業、物質賃貸業
B　漁業	L　学術研究、専門・技術サービス業
C　鉱業、採石業、砂利採取業	M　宿泊業、飲食サービス業
D　建設業	N　生活関連サービス業、娯楽業
E　製造業	O　教育、学習支援業
F　電気・ガス・熱供給・水道業	P　医療、福祉
G　情報通信業	Q　複合サービス事業
H　運輸業、郵便業	R　サービス業（他に分類されないもの）
I　卸売業、小売業	S　公務（他に分類されるものを除く）
J　金融業、保険業	T　分類不能の産業

統計局より　http://w

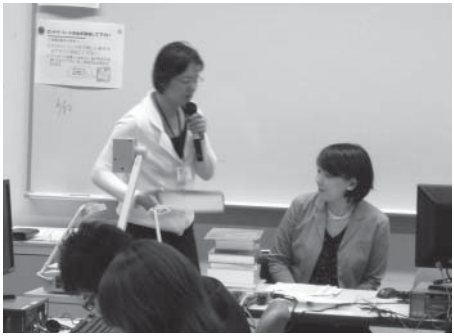
⑤

図書館の分類　600番台が対応

60 産業
61 農業
62 園芸
63 蚕糸業
64 畜産業.獣医学
65 林業
66 水産業
67 商業
68 運輸.交通
69 通信事業

日本十進分類法
（NDC）9版

①～③のpptシートをインターンシップ担当教員が、
④⑤のpptシートを図書館職員が説明



実施当日の教室風景

担当教員と図書館職員が交互に解説。現物の図書・資料も回覧。

2.3　実施後

学生アンケートの結果

①今回の授業を通じて、図書館の方々が授業内容とかかわる知識や技術を持っていることを初めて知った。

「はい」29名 ／ 40名中

②以前、図書館の「情報検索講習会」を受けたことがある。

「はい」 7 名 ／ 40名中

③②で「はい」と答えた人の内訳

「ゼミ内で受けた」 2 名 ／ 7 名中

「通常講習として受けた」 5 名 ／ 7 名中

④今回のコラボ型授業は、「情報検索講習会」よりもわかりやすい。

「はい」 4 名 ／ 7 名中

⑥自由記述

＊企業分析のためにこんなにたくさんのデータベースがあることを知りませんでした。

＊図書館のスタッフの方が具体的な調べ方を詳しく教えて下さり、先生がどうしてそのような検索方法をとるのか、の全体像をお話下さったので、とても分かりやすかったです。どっちか一方ではなく、コラボレーションして両方の情報を与えて下さった方が、すんなりと自分の中に入ってくると思いました。
＊今までこういったものを受けたことがなく新鮮だった。図書館の方々の豊富な知識、ツールを、教授がうまくまとめて説明したりなど、補完し合っているとことはよいと思った。
＊学部の先生だけでなく、職員の方も授業に参加してくれることは新鮮さを感じると同時に、本気で授業をしてくれているのだという熱意を感じました。
＊普段パソコンをあまり使わないので、ついていくのにせいいっぱいでした。
＊図書館にこれらの資料があるとは知らなかったので、これから活用していきたいと思いました。
＊図書館の可能性の大きさに衝撃を受けました。

3．図書館による学習支援の可能性

3.1　残された課題

3.2　図書館による学習支援の可能性

＊コラボレーション型授業のメリットとデメリット
＊FDへの貢献

第二部　ディスカッション

［指定討論］

図書館と学生をつなぐ教員の役割を問う

大学教育開発・支援センター員、法学部教授
小川 有美 氏

河野　それでは、大変お疲れのところ申し訳ございませんけれども、このまま引き続き、第２部のディスカッションに入っていきたいと思います。そこでまず、この後、ご討論を加えまして、指定討論として法学部の小川先生にお話をいただきたいと思います。

組織的な取組みを考える

小川　河野先生、ありがとうございます。法学部の小川でございます。一教員として、大学教育開発・支援センター員として、図書館とのコラボレーションができるということを、大変嬉しく思っています。図書館ワーキンググループも、大学の中で「縄張り」を超えていけることが大事ではないかという発想で始めました。ちなみに今日は満員御礼ですが、図書館関係以外でいらした方はどのぐらいいらっしゃるのか、手を挙げていただけますか。ありがとうございます。思ったより多かったのでホッとしました。是非、図書館以外の教職員にいらしていただきたいと思っていました。

これまでFDについてあれこれ思い巡らせてきたのですけれども、いろいろ考えるに学生が本をもう１冊でも、あるいは１ページでも多く読んでくれたら、それがどんなに授業改善としてはいいだろうという、素朴な発想に至りました。先程の小林さんのデータで一目瞭然であるように、立教大学の学生１人当たりの貸出数というのは、同ランクの他私大と比べても苦戦しています。学部間ではうちの法学部ははっきり言って平均より下で、ちょっとショックでした。ヒューマン

ルネッサンス研究所という所の学生の意識調査で、もっとお金を使いたい分野というのがあって、本を買いたいというのが6位だったんです。携帯とか飲み会というのはもっと順位が低い。これは本を読みたいと思っているのか、むしろそうではなくて、実際にたくさんお金を使っているのは携帯や飲み会のほうであって、本には使われていないという後ろめたさが表れているのかなと思ったのですけれども、いずれにしても、「本を読め、読め」とただ抽象的に言われても読まないですよね。そういう念仏のようなことを繰り返していても意味はない。むしろ組織的な取り組みをみんなで考えていかなくてはと思っているわけです。本日は、前半で図書館スタッフ、経済、経営の先生方に先端的なご報告をいただいたので、私は少し俯瞰的な観点から話題を提起したいと思います。

学習支援における2つの機能的な要請

図書館を通した学習支援には、2つの機能的な要請があるのだと思います。1つはユニバーサルな機能です。これは授業・試験に直接関連あるものを読ませるということに限らず、もう少しすそ野、土台となるリーディング・カルチャーを育てることを意味します。例えば、PISA（OECDの学力到達動向調査）の読解力順位において日本は急落していますが、フィンランドが1位です。フィンランドでは、人口当たりの図書館の数が多く、利用率も世界1位なんです。IT国家でもあるし、図書館社会でもある。教育の中では、クリティカル・シンキングを促す読書教育がある。なぜ、どうしてという言葉を「ミクシー」いうのですが、自分の意見を言ったり、書いたりすると、それはどうしてなのか、クラスで問われる。それにまた答えていかなきゃいけない。「富士山はきれいだ」と言った時に、それはあなたが思うのか、何か客観的な理由があるのか、それとも本当はそうは言えないのではないかとか、そういう訓練を義務教育の頃からされて育つ。日本の場合は、自分の意見なのか、誰かが論じているのか、別の見方があるのか、といったことを分別して考え、書くトレーニングを、大学生になって初めてやる、あるいは大学生になってもなかなかできていない、そういう気がします。ということは、教員が基本教科書をきちんと指示することはもちろん大事ですけど、それ以外に、すそ野の部分まで紹介し、それを単にあるよと伝えるだけでなくて、その所在地までつなげること、例えば、どこの出版社で何年に誰が出した本で、

何系図書館や何々データベースに入っているということを情報としてきちんと伝えられるという基本的な機能が必要だろうと思います。

第2に、今度はユニバーサルではなくて、高岡先生がおっしゃっていたようなカスタムな機能です。例えば、標準的な検索の講習だけではなくて、ゼミのリサーチとかグループワークとか、論文の執筆にそれぞれある程度カスタマイズして応えられるリソースやスタッフや場所の提供ということです。その場合、テキストというのは教員が用意すべきか、図書館に常備すべきか、中間的なリソースですね。欧米では、テキストとして用いる論文を束ねて印刷したものなどを学生に配ったりします。これは、大学の授業ではしばしば一つの教科書では足りないことを考えると便利です。そう考えますと、図書館だけではなく、教材の提供も含めて、大学で機能分担を考えていったらよいのではないでしょうか。

まとめると、ユニバーサルな機能とカスタマイズされた機能をどうやって形作っていくか、ということが課題と言えます。先ほどはラーニングコモンズの話題がありました。その例として、アメリカの大規模な設備とか、高い学位をもったライブラリアンといったものが紹介されますけれども、日本版ではそれを即実

現できないでしょう。それでも、目的やコンセプトを意識的に立てて、具体的に取り組んでいくことはできる。立教大学の取り組みから伺ったように、普通の学生や院生でもチューターができるんだということ、それから、講習会の追跡調査とか、貸出冊数の調査をして得られた客観的なデータを今度はフィードバックして、能動的に改善に生かしていけるのではないか、といったことです。

図書館初企画の授業を経験して

それから角度を変えて、私の授業経験からの話題提起をしたいのですけれど、今年度全学共通カリキュラム総合B科目「北欧に学ぶ－知識社会を豊かに生きる力」のコーディネーターをさせていただいています。これは図書館が企画した初めての全カリ科目だと伺っています。前館長の青木先生、現館長の石川先生、図書館の牛崎さん、阿久津さん、藤野さん、芦田さん、宮尾さんによる、長い時間をかけた企画へのご協力、毎回の授業にも交代で図書館スタッフがいらしてくださっていて、教員としてすごく贅沢に授業をやらせていただいています。そこでは、各回の参考文献やWeb情報やデータベースの使用法を図書館スタッフが学生に直接紹介してくれますし、講師が翻訳家だった場合は関係する本を現物で紹介し、指揮者の方の場合はCDや音楽データベースNAXOSの音楽を流して、といったように授業に役立つ情報を丸ごと示してくれるのです。これはちょっと特別にゴージャスな授業をさせていただいているのであって、すべての授業をそのようにするわけにはいきません。ただ、そのように多面的に図書館を授業に活用しうるという可能性が示されたとき、逆に教員が、どうやって学生と図書館にある豊かな知的リソースをつなげていくか、授業の組み立て方を問われると改めて思いました。これは谷ヶ城先生もおっしゃっていたとおりです。一言でいえば、授業と図書館の距離を近付けることですが、これは設備の改善ももちろんですけれども、認知的にも心理的にもつなげていく余地がまだまだあると思った次第です。それは、教員と図書館の双方向的な課題だと思っています。

図書館を通じた学習支援というのは、大学の「マクドナルド化」ではない道である。そう申すと本当のマクドナルドにちょっと失礼ですけど、「マクドナルド化する社会」という社会学者リッツァの有名な本がありますので、この表現を用いました。大学の教育というのは、ファストフードだけでなく、スローフードも

あるし、いろいろな世界があることを知ってもらうためにある。図書館という知の市場（いちば）に学生が出かけて行って、簡単なものから、もしかしたら難しいものまで自分で料理して生きていけるような、橋渡しの授業をしたい。以上です。

［ディスカッション］

河野　それでは、これからディスカッションに入りたいと思います。ご発表の方々は席におつきください。このディスカッションは、図書館の方だけではなく、外部の方からもいろいろな方がいらしているということですので、是非、自由にご質問いただきまして、最初のご提題から最後のコメントまで、「これこれの方に、こういう質問です」とか、「こういう意見があります」といった形で、自由にディスカッションしていただきたいと思います。それではご質問のある方はお手をお挙げになって、できましたら簡単で結構ですから、ご所属をおっしゃってください。よろしいでしょうか。

質問 1

小澤　経済学部の小澤です。大学教育開発・支援センターのセンター員をしております。去年からの懸案事項で、新中央図書館ができることになっておりますが、小坏さんと小林さんにお伺いしたいのが、新中央図書館でラーニングコモンズの実現に関しては、どの程度できるのか、どの部分はできるけど、この部分はできなさそうだという見通しをお伺いしたいのですが。お願いします。

小坏　解釈次第ですが、できると思います。アメリカのように、どんな場所でも話ができるというような図書館を目指しているというわけにはいきませんが、グループ討議ができるグループ学習室を多数用意するという点では、コミュニケーションができる場が図書館に多数できると思っています。かつ、コンピュータヘルプサービスや、今あるラーニングアドバイザーですとか、レファレンスサービスということが提供できる、人的サービスと、ハードウエアについてはお金が許す限りできると思います。私はラーニングコモンズという場ができるというより、図書館をラーニングコモンズにしなければいけないと思っています。

小林　小坏さんは、新中央図書館の会議に出ていらして、一番お詳しいので、補足というよりちょっと実態をお話しますと、「ラーニングコモンズってアメリカで流行っているんでしょ。日本でもそんなの必要なの？」という声があるかもしれないんですけど、実際は立教の学生も、例えばメディアライブラリーというパソコンがいっぱい並んでいる所、基本的に１人１台静かに使ってもらう部屋で、こそこそと２、３人で「ここさー、もうちょっとこうしたほうがいいんじゃない？」などと話し合っていて、「すいません、声出しちゃって」と遠慮しながら、

グループワークに取り組んでいます。授業をやっている先生方はご存じだと思うんですけど、そういう実態が実はあって、それをやる場が学生にとっては今ないということですので、新中央図書館になってから、小さな部屋をいろいろ作るということも必要でしょうし、もしかしたら静粛に勉強するエリアではそういうことはしては駄目だけれど、「ここのフロアは声を出していいよ」というフロアで、ちょっと友達がいた、あるいはゼミの学生がいたので、そこで「ねえ、あれどうする？」、「ここにこういう本があるんだよ」という活動ができるフロアも多分できるんじゃないかなと。そういった意味で、いろいろな形で実現ができるといいなと思っております。

小澤　ぜひ、実現をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

秋山　図書館の秋山と申します。今のラーニングコモンズに関連して、本年度からメディアセンターのご助力のお陰で、8号館や5号館の廊下にパソコンやプリンターが並んでいます。そこが、今おっしゃった、ラーニングコモンズのような様相を呈しておりまして、学生達が飲み物を飲みながら、パソコンを使って、相談しながらいろいろな成果物を出しているという現状があります。ご紹介までと思いまして、発言させていただきました。

河野　ありがとうございます。

質問２

家城　理学部の家城です。小坏さんと小林さんに質問です。先ほどのお話に関連して、アメリカに行った時には、Quiet roomでもしゃべっているというところで、今のお答えだと、日本でそういうのはできないだろうということですが、実際、アメリカだとうるさくないのでしょうか。なぜ、そこが違うのだろうかと、少し疑問に思いました。

小坏　「Quiet reading room」では話はできないです。ただし、PCの利用はできます。

家城　それがPCの所とか、基本的には話はできるほうなのでしょうか。特別な場所ではできないけれども、普通のエリアではしゃべっていいということですか。

小坏　普通のエリアでは会話は可能です。

家城　そうすると、うるさくないだろうかと思うのですが、日本では多分それが想定されていなくて、限定された場所でやりたいということですよね。そこの違いはいったいどこにあるのでしょうか。

小坏　そうですね。これはちょっと私もどちらがいいのかわかってはいないのですが、アメリカの図書館では、会話は基本的にはどこでもしてよいのですが、そんなに雑談をしているという雰囲気はないです。「Quiet reading room」という限られた空間においては、フロア分けされているのですが、そこでは歩くのすら気をつけないと睨まれるというような状況で、話なんかしていたら、すぐ学生さんから怒られてしまうというような雰囲気があるのですが、日本で果たしてそれを区分けしたとしても、「基本的にここは話をしていいよ」と許可した場合、どんなエリアになってしまうのかということは想像できません。今の段階では、新中央図書館においても、グループ学習室を多く用意して、そこでは会話可とするというようにしたほうが安全ではないかと思います。議論の場をその中で限定して行っていただいたほうが安全ではないかと思います。逆に、立教大学で学んでいるアメリカからの留学生に聞くと、立教大学の図書館は静粛に勉強できていいという話もありますので、これはどちらがいいのかということについては、結論は私の中では持っていません。ただ、アメリカの法科大学院の図書館を訪ねたところ、図書館長で、かつ法科大学院の大学院委員長も「もっと図書館の中で

議論すべきだ」というようにも言っておりましたけれど、そこまで日本はいくのかなというふうに思っております。

家城　もう一つお聞きしてよろしいですか。最初の図書館員が非常に多いというお話のところで、サブジェクトライブラリアンの方が、専門分野の修士号を持っていらっしゃるということで、これは非常に面白いと思いましたが、今、立教大学の図書館で行っているラーニングアドバイザーは、そういうサブジェクトごとにいろいろなことをやるというようなことはあるのでしょうか。

小坏　ラーニングアドバイザーは何曜日にどの研究科の方がいるというようなことを案内していません。基本的には専門の内容を聞くというよりも、図書館という場をベースにして学習の仕方を学んでいただくことをメインに、ラーニングアドバイザーを置いておりますので、専門分野について質問してくださいというものではありません。調べ方やレポート・論文作成の「いろは」について、一緒に学んでいきましょうという立場ですので、専門の内容について聞くというようなスタンスは取っていません。また、それは大学院の博士後期課程の方に対しても負担が大きすぎるというように判断しています。

質問３

熊谷　教務部熊谷です。３点、質問があります。１点目は、小坏さんの発表されました、アメリカの大学図書館における学習支援のところで、図書館員の構成ということで、ワシントン大学の構成を出されていますが、管理運営専門職の中の資金調達担当の方が、どのような仕組みで資金調達をしてきているのかというところをもう少しお話いただけましたらと思います。

小坏　正確にお答えすることはできないのですが、ワシントン大学はシアトルということで、西海岸のラフスタイルな街で、私が最初に視察に大学へ行った時、スーツを着て、ネクタイをして行ったのですが、大学内で浮きました。図書館員の方に「そんな恰好をしてきたら変な風に思われるから、やめたほうがいいよ。ネクタイしているのはシアトルでは、法律家か悪人かどちらかだから、ネクタイなんかしなくていいのだよ」と言われました。図書館の中でも図書館員はみな非常にラフな格好なのですが、唯一、そのファンド・レイジングの方だけはネクタイをしている。つまり、企業をまわって「こういった活動をしているので、こう

いった人材を育成するので、寄付をいただきたい」ということで、それを専門にされている方が図書館の中には何名かいらっしゃるそうです。シアトルというのは、ビルゲイツの故郷ですので、例えば、法科大学院の図書館の入口には、札が下がっていて、金色の札、ビルゲイツ何億というようなことで、札ごとに金額を分けて、「この人はいくら寄付してくれた」ということがわかります。学費も高いのですが、寄付で成り立っている部分がアメリカにはあるようですので、ファンド・レイジングの専門の方が大学にはいらっしゃるというように聞いています。ただ、それについて詳しく調査したわけではないので、正確にはわからないです。

熊谷　ありがとうございます。2点目ですが、小林さんにお配りいただいた資料の中で「図書館活用講座」をご紹介くださっていて、とても面白い試みをされているなと感じました。実際にこういった仕組みを新しく作られて、どれぐらいの学生が参加をされているのか、もし数がわかれば伺えればと思います。

小林　実は、「図書館活用講座」という名前にしたのは去年からです。それまでの間も、ある時期に、5月、6月だったり、10月だったりという時期に、似たような内容の講習会はしていましたが、「図書館活用講座」というふうに組織化していませんでした。「OPACの使い方講習会」「データベースの講習会」「論文・レポートの書き方講習会」というような、個別の内容を出す宣伝の仕方をし

ていましたが、ほとんど人が来ないことが大きな課題だったんです。そこで、去年から「図書館活用講座」というふうに組織化をし、ステップを踏んで受けていただいて、ちょっとした特典も付けるというやり方に変えて、だいぶ来ていただいていますが、やはり授業内情報検索講習会の何千人という規模と比べましたら、非常に数は少なくて、いくつか日を用意しておいても、申込みが0だからやらなかったところがあったり、来ていただいても2、3人というような形です。ところが、今年に入りまして、いろいろとご宣伝もいただいておりまして、今、いっぱいです。実は、パソコンが16台しかない部屋でやっているので、定員15名ということでやっています。いっぱいになる回が出てきていまして、プログラムとしては3時からとアナウンスしているんですが、ご要望に応じて、急きょ回数を増やしたり、時刻をずらしたりという対応もしています。ですから、合計何名という数は、わからないです。

小圷　今、小林さんが言ったとおりなのですが、6月実施分については、ほぼ毎回満員というような状況で運営しています。昨年度はこれを始めるに当たって、どうしても成功させたい思いもあり、平日は毎日開催で、午前、午後、1日2回無理をして開催しました。昨年度、延べ人数としては300人くらいの参加があったと思います。今年は図書館のスタッフ数が減りまして、今年は午後だけ、週に3回という形で回数を減らして運営しているような状況ですので、昨年度の回数まではおそらく届かないかと思っております。

熊谷　ありがとうございます。最後の3点目ですが、谷ヶ城先生と高岡先生のお話を伺いまして、これは質問ではなく、自分の感想ですが、私も職員として仕事をしていまして、情報不足で結構行き詰まることが多くありまして、その時にどこにアクセスしたらいいのかということが、なかなか気付きづらいです。今、先生お2人のお話を伺っていまして、これは、高岡先生のお話のGoogleでの検索に引っかからないのであればその関連分析という視点の転換と言いますか、そういった部分は、情報をたくさん持っている図書館の方やまた別の方にも相談していくということは、とてもいいことだと感じました。ありがとうございました。

質問４

今田　大学教育開発・支援センターの今田です。小林さんの発表の中で紹介されたラーニングアドバイザーというのは、大変意欲的な試みだと思いながら伺いました。レポートや卒業論文作成のアドバイスを行っており、学生からは「レポートはどうやって書くの」という質問が多いというお話がございました。そういう実態がある一方で、昨年来、立教大学の初年次教育について大学教育開発・支援センターが中心になって調査を行いまして、その結果では、レポートの書き方についてはほとんどの学部が１年次の基礎演習等で教えているということでした。このくい違いがどういうふうにして起こっているのかなというのを素朴に疑問に思いまして、もう少し実態について踏み込んでいかないといけないのかなとも思っておりますが、この点について、ご発表者、本日ご登壇の方々のご意見をお伺いしたいと思います。

小林　昨年の後期にこういったことがありました。ラーニングアドバイザーを始めて、わりとすぐの時期に、池袋キャンパスでやっていることなのに、わざわざ新座から学生が来まして、「卒業論文書かなきゃいけないんだけど、まだ何もやってないんだけど」ということがありました。12月ぐらいにやってきた４年生でした。各学部でいろいろな形でレポートや論文の書き方を教えていらっしゃい

ます。しかし、今日の先生方のお話にもありましたけれども、学生が一番それをやらなきゃいけない時に聞いているのではないのかもしれないという気がしています。つまり、まだレポートの課題も出ていない、卒論はまだまだ先という時に、レポート・論文の書き方を教わっても、「ふーん」とそのままになってしまい、いざ自分が「書かなきゃ、来週出さなきゃ」という時になって、ラーニングアドバイザーに駆け込むというところもあるのかなと感じていますが、他の皆様はいかがでしょうか。

小川　初年次教育の目的と成果調査を具体的に確認したほうがよろしいかと思うのですが、例えば、法学部の基礎文献講読という初年次の演習では、ごく一般的なリテラシーを教えるわけです。初めて大学生としてものを書くというレベルです。しかし、法学部の場合は演習論文、他学部では卒業論文のようなレベルになると、やはり求められる分量も書式もクオリティも違っていて、その違いは大きいのではないかというふうに思いました。例えば、先程ご紹介した全カリの授業で、あるテーマについて調べたいといってきた学生に具体的に紹介すると、「立教の図書館ってすごいんですね」と感想で書いてきました。つまり、必要とされているもののグレードが上がると、使うべき手段というものの必要も変わってきて、それに初めて気付くということがあるのではないかと思います。

河野　谷ヶ城先生、高岡先生はいかがでしょうか。

谷ヶ城　経済学部の場合には、初年次教育のライティングやリーディングといったスキルを教えるのは、前期の2単位だけです。ですから、一応教えると言えば教えますけれども、それで学生が本当に1回でマスターできるかというと当然できないわけです。ですから、それは継続的にやらなければいけないというのが一つ。もう一つは、先程も何度かお話に出ていますけれども、彼らは図書館を使える場面を設定すればきちんと使います。ですから、学生の負荷や状況を考えながらになるのでしょうが、図書館を使う場面やレベルを適宜設定していくことが大事なのではないかと考えています。

高岡　私もほぼ同じような考えです。経営学部では、現在、カリキュラム改革を検討しておりますが、そこで同じような話題が出ました。つまり、論文が書けないと。そこで、2年次前期から実施している専門ゼミを2年次後期からにして、浮いた半期分で、ゼミに入る前に「論文の書き方講座」を強制的に全員受講させるべきではないかという案が一時持ち上がりました。ただ、問題意識が芽生える

時期は各自異なりますし、テーマにより書く手法や分析手法も少しずつ違ってくるわけです。そうであるならば、専門ゼミの教員が、20人を相手に適切な時期に適切な内容を教えていく、あるいは学ぶための気付きを与えていくというほうが良いであろうという結論になって、話は元に戻りました。図書館の講習会で教えているような情報の探し方のようなことと、ラーニングアドバイザーが提供できること、そして、専門ゼミの先生がアドバイスすることが、どのように違っているのかを明確にするのが、ポイントだという気がします。また、先程小川先生がおっしゃった点にも絡みますが、専門性の高いテーマに関して、調べたり、ライティングしたりする時は、自分の中で書く時期やテーマが半分見えてきつつあり、ユニバーサルからカスタムに動きつつある段階だと思います。そのタイミングで図書館ができることと、まだそのあたりが見えていないけれども、図書館に出かけて行って回遊することで、何となく、少しずつ「知」の切れ端が引っ掛かってきて、自分の中で何ヶ月か何年か経ってから大きなものとしてまとまるというのは、全く「知」のまとまり方のプロセスが違うと思うので、その時に図書館ができることというのと分けて考えたほうが良い気がします。

質問５

河野　では、最後に一つだけ質問をお受けします。

松山　コミュニティ福祉学部の松山です。小川先生と高岡先生のご発表を聞いて、本当にすごいなと、立教大学ってすごいんだなと思いました。教員一人の能力の中で授業をするというのは、やはり限界があって、自分の能力を超えて、専門家の力を借りて、いろいろなコンテンツをつくりながら、魅力的な授業をつくっていけるんだなと思いました。それで、これを新座キャンパスでも実施していただけるのでしょうか。今日の資料を教授会に持ち帰って紹介した時に、「それでは、こちらでも実施して欲しい」という声が出てくるかもしれないですが、その場合、図書館としてどのぐらい応えていただけるものかというのをお聞きしたいです。

河野　誰にお答えいただきましょうか。最後になりましたので、ちょうどうまい振りかなと思いますので、図書館長の石川先生に、今の質問に対するお答えと、最後に総括をお願いしたいと思います。

［総　括］

新中央図書館の開館に向けて、〈内〉側と〈外〉側の取り組みの両立が課題

図書館長　文学部教授
石川　巧氏

石川　総括というよりは感想めいたことをコンパクトにお話ししたいと思います。本日のお話を伺っていて、みなさんに共通するキーワードとして私が思い浮かべたのは「二兎を追う」ことの大切さです。図書館というのは、時に矛盾したことを同時に追求することが求められる機関なのだということです。

たとえば、小圷さんがしたアメリカ視察の報告で、学生がPCを持ち込んで議論しながら学習・研究活動を行えるような環境が紹介されていますが、図書館というのは、キャンパスの中で唯一、一人きりになって自分と向き合える空間でもあるわけで、ディスカッションと思索をどのように共存させるかという課題が出てくるわけです。

小林さんが報告してくださった学生への利用支援活動でもそれは同じです。学生に対して、どのようにインセンティブを与えていくかを考えたとき、こちらが手取り足取り教えて彼らが期待するサービスを提供すればいいかというと必ずしもそうではありません。それはときとして受動的な学生たちを増やすことにつながる可能性があります。広報を充実させ、私たちの取り組みを理解してもらえるような機会を設けることは必要ですが、大切なのは彼ら自身が図書館を能動的に利用するように働きかけていくことなのだと思います。

それから、谷ヶ城先生のお話も非常に興味深かったです。今までの図書館は、どちらかと言えば学生が来るのを待っている〈静〉の体制でしたが、学習支援、情報リテラシー教育、キャリア形成などとの連携という観点からすれば、これからの図書館に期待されているのは、スタッフが外に出ていって大学教育の中にそのノウハウを活かし、授業サポートなどを行っていく〈動〉の体制かもしれませ

ん。私たちは現在、2012年秋に開館する新中央図書館に向けて、ハード面、ソフト面それぞれの課題を検討し、新しいサービスのあり方を考えていますが、重要なのは、図書館の〈内〉側をどうするかという問題と〈外〉側に向けてどのような取り組みをしていくことができるかという問題を、粘り強く両立させていくことなのだと感じました。

高岡先生の授業報告は、その実践例として素晴らしいものだと思います。高岡先生のお話の中で特に興味深かったのは「補完」という概念です。個々の教員の専門的スキルと図書館がもっている様々なノウハウを提供しあったり足りないところを補いあったりすることによって、授業をより分かりやすく、より有意義な内容にすることができるのだということを理解することができ、私としても非常に勇気づけられた思いがします。

全体討論に入る前に小川先生から述べてくださった問題の核心は、ユニバーサル機能とカスタム機能の同時追求ということだったと思いますが、それもある意味では、図書館の機能を限定せず、あえて「二兎を追う」姿勢で臨むことの大切さを示唆しているのだと思います。小川先生には、今年度前期の全カリＢ科目に図書館が提供した「北欧に学ぶ」という授業のコーディネーターをご担当いただいておりますが、この授業を通して蓄積された成果と課題を、今後、細かく検証して、図書館におけるユニバーサル機能とカスタム機能の両立を図っていけたらと考えた次第です。

このようなかたちで、本日、みなさま方から多くの宿題をいただいたわけですが、それを着実にクリアしていくために重要になるのは、やはり「人」です。図書館というのは、書物や情報というかたちで人類の叡智を蓄積していく場所ですが、それをよりよく活用するためには、人と人が出逢い、新たな関係性を構築していく環境、あるいは、人々がそれぞれの能力を最大限に発揮していけるような環境が必要です。

また、図書館というのは基本的に人を育てるためにあるわけですから、利用者に対して知性の大切さを教え、知らないことを知るのはそれだけで素晴らしいことなのだと伝えることも重要です。そうした諸々の意味において、図書館は人を大切にする場でなければならないと思います。どんなにIT化が進んだとしても、人と人との交流が新たな知性を育んでいくということを忘れてはならないと思いました。

「人」ということで言えば、図書館で働くスタッフの体制についても申し上げておかなければなりません。現在、図書館には約30名の専任職員がおり、120名近い非専任職員の方々とともに日々の業務に当たっています。今、全国の大学図書館では、専任職員を削減してほとんどの業務をアウトソーシングに委ねていく傾向にあるようですが、私はそれを強く懸念しています。ここでも「二兎を追う」ことが重要だと思っています。つまり、専任職員が個々のスキルアップを果たし、立教大学の図書館員として外部機関との連携や相互協力を推進していくことと、非専任職員の生活を保障しつつ働きやすい職場環境を整えていくことを同時に実現しなければ、本日のシンポジウムでご提案いただいたような諸提言に応えていくことはできないだろうと思うのです。

最後になりますが、新中央図書館に向けて私が抱いている一つの夢をお話しさせていただきます。――私どもは、昨年秋に、図書館の利用という観点から学習・研究サポートをしてくれる「ラーニング・アドバイザー」を発足させ、大学院博士課程の院生を配置してきました。私はそれをより発展させたかたちで、

「ライティング・アドバイザー」にしたいという希望をもっています。単なる情報リテラシーのアドバイスではなく、論文・レポートから履歴書・エントリーシートまで、とにかく文章を〈書く〉ということに特化して、その方法はもちろん、自分の発想やアイディアをどのように表現していくかということまでアドバイスするようなサービスを図書館が提供できたらと考えています。日本の大学ではまだほとんど実現されていないと思いますが、新中央図書館の開館はそうした取り組みに乗りだす千載一遇のチャンスなのではないでしょうか。

以上、雑駁な感想を述べさせていただきました。本日は、多方面からたくさんのアイディアをいただきましたが、それを集積しながら新中央図書館への準備を進めていきたいと考えています。今後とも、みなさま方からのご支援をお願い致します。本日はありがとうございました。

河野　石川先生、どうもありがとうございました。質問などまだ話はつきないかと思いますが、是非コメントペーパーに質問などを書き入れていただき、これにて終わりたいと思います。それではこれをもちまして、「立教大学における学習支援と図書館」のシンポジウムを閉会にさせていただきます。最後に、ご登壇願われた先生たちと職員の方たちに、もう一度拍手をお願い致します。どうもありがとうございました。

バックナンバー

●立教大学 大学教育開発・支援センター 大学教育開発研究シリーズ

No.1 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請—, 2006

No.2 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために—, 2006

No.3 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学—, 2007

No.4 わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム—, 2007

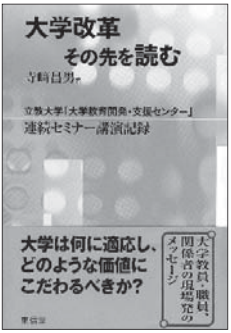
No.5 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道—, 2007

No.6 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて—, 2008

No.7 立教大学の今後と中教審の審議
―学士課程教育の再検討と将来を考える―, 2009

No.8 バージニア工科大学視察報告
―米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ―, 2009

●立教大学「大学教育開発・支援センター」連続セミナー講演記録



寺崎昌男
『大学改革　その先を読む』, 2007
東信堂, ¥1,300

大学教育開発研究シリーズ　No.9
立教大学における学習支援と図書館
2009年10月発行

発　　行
立教大学　大学教育開発・支援センター
〒171－8501　東京都豊島区西池袋3－34－1
TEL：03－3985－4624　FAX：03－3985－4615
http：//www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/
e-mail：cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印　　刷
株式会社 ナナオ企画
〒104-0043　東京都中央区湊1-6-11
TEL：03-3297-2805　FAX：03-3297-2807

©立教大学　大学教育開発・支援センター　　無断転載を禁ず　ISSN　1881-1035

SAINT PAUL'S UNIVERSITY · TOKYO ·
MDCCCLXXIV
PRO DEO ET PATRIA